

天理市埋蔵文化財調査概報

平成8・9年度（1996・1997年）

2003

天理市教育委員会

例　　言

1. 本概報は、天理市教育委員会が平成8年度および9年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告である。
2. 調査については、社会教育課（現文化財課）文化財係の泉　武、松本洋明、青木勘時が分担した。それぞれの調査担当者は目次に明記した通りである。また、現地調査、遺物整理から本書作成に至るまで下記の整理補助員、学生諸氏のご援助を得た。記して謝意を表する。

芳村信芳、中森軍之介、中森富美子、河喜多淑子、西山陽子、南　憲和、松本寿子（奈良大学学生）、中山玉生（京都橘女子大学学生）、加藤一郎（早稲田大学学生）、八重櫻由美子（天理大学学生）、宮崎雅彦（帝塚山大学院生）、山木樹志（奈良大学学生）、吉田和彦（奈良大学院生）
3. 本概報の執筆は、それぞれの調査担当者および参加者が分担し、下記にその文責を明記した。なお、編集は泉が担当した。

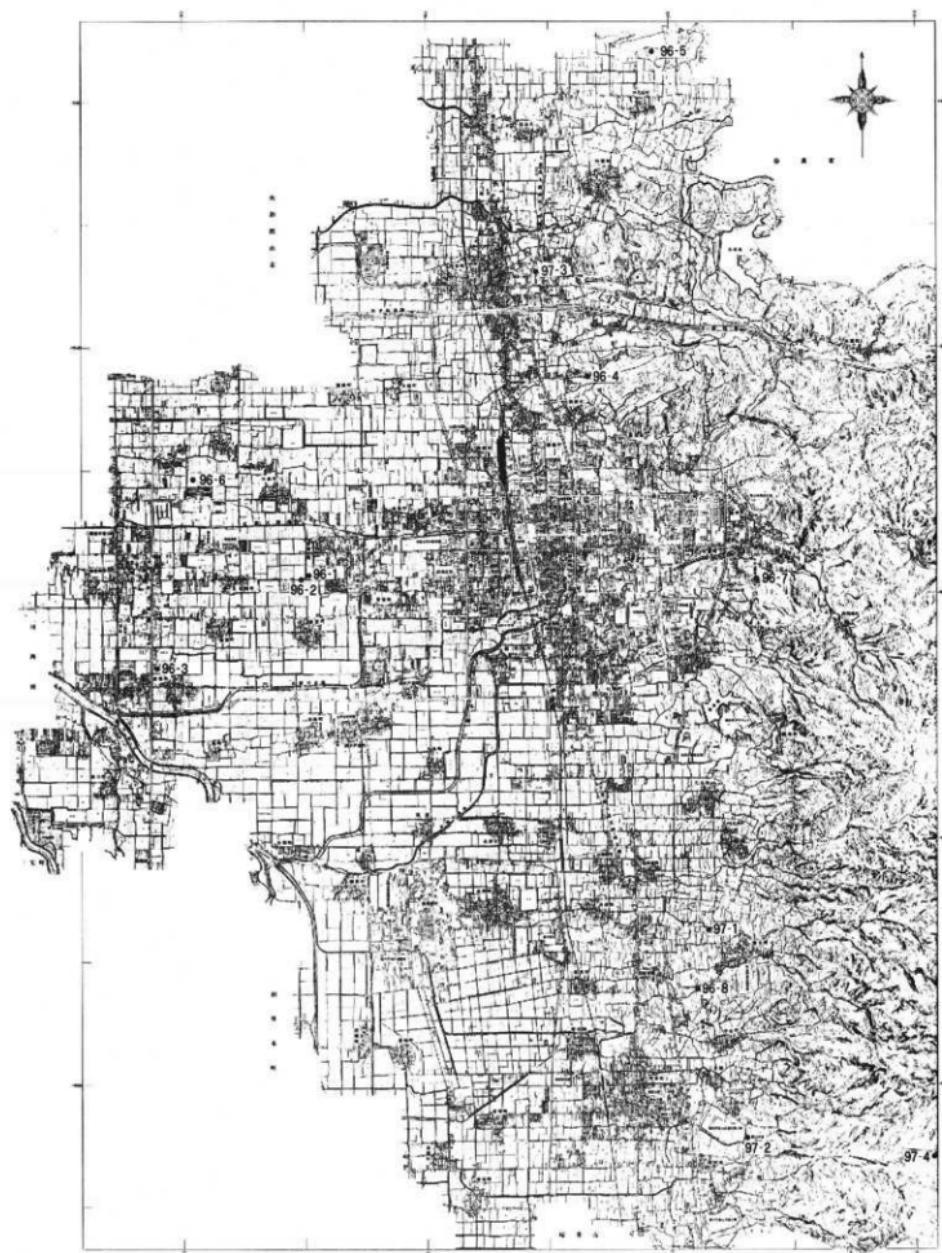
目　　次

平成8年度（1996）

1. 平等坊・岩室遺跡（第17次調査）	（青木）	1
2. 平等坊・岩室遺跡（第18次調査）	（松本）	10
3. 嘉幡遺跡	（松本）	14
4. 別所遺跡（第3次調査）	（青木）	18
5. 小林古墳群	（青木）	24
6. 中町遺跡	（泉）	32
7. 石上神宮境内地遺跡	（泉）	36
8. 下池山古墳隣接地	（泉）	40

平成9年度（1997）

1. 波多子塚古墳	（青木）	49
2. 櫛山古墳（第5次調査）	（松本）	57
3. 柿本廃寺	（青木）	68
4. 龍王山城南城跡	（泉）	73



平成 8・9 年度遺跡調査地点

平成 8 年度
(1996)

1. 平等坊・岩室遺跡（第17次）－平等坊町

I はじめに

平等坊・岩室遺跡は天理市中央部の平等坊町および岩室町一帯に所在する弥生前・中・後期の全期間を通じて営まれた弥生拠点集落である。これまでの調査により各時期の弥生集落を囲む環濠の存在が知られ、奈良盆地東部における小地域圈の中核として弥生以後にも発展していくことも判明している。

今回の調査は平等坊・岩室遺跡における第17次調査として実施したものである。調査は平等坊町214-2番地における民間の駐車場建設の事前調査として平成8年7月23日より同年8月9日までの期間に実施し、弥生集落北辺の状況確認に主眼をおいて幅4mを基調とした南北31mの調査区を設定しておこなった。総調査面積は約124m²であった。

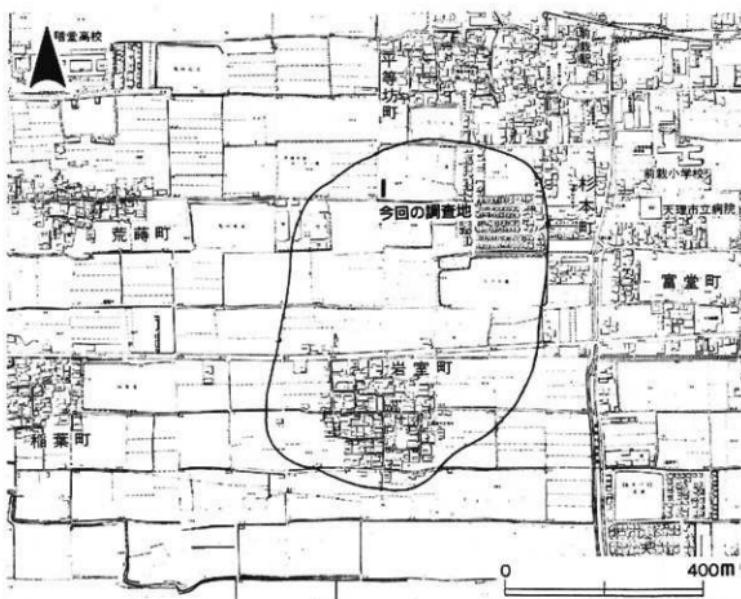


図1 調査地点位置図 (S=1/10,000)

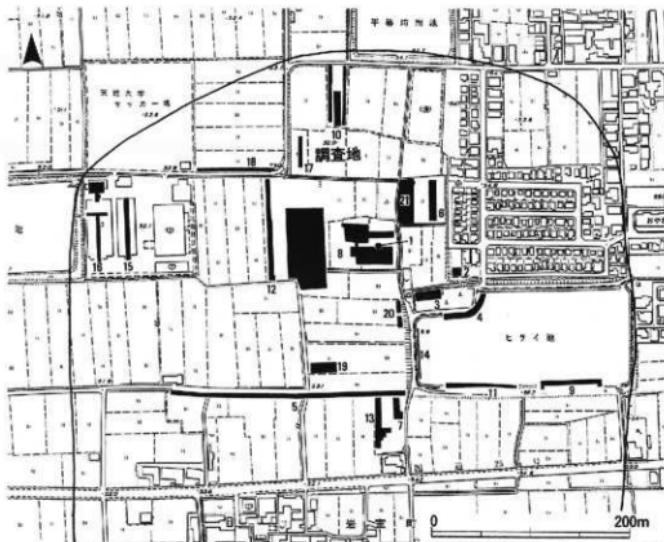


図2 調査地点位置図 (S=1/5,000)

* 数字は平成15年現在までの調査字数を示し、今回の調査区は17の地点に該当する

II 層序と検出遺構

1. 層序

調査区における基本的な層序は以下に示す通りである。

第Ⅰ層：耕作土

第Ⅱ層：床土

第Ⅲ層：にぶい黄褐色粘質土

第Ⅳ層：黄灰色砂混じり粘質土（上部）・黒褐色粘質土（下部）ともに遺物包含層

第Ⅴ層：灰・黄灰～黑色砂混じり粘質土・粘土の無遺物層（地山）

現地表面下約0.4mまでに近年までの水田耕作に伴う土壤堆積による第Ⅰ～Ⅲ層の上部堆積層が認められ、調査区の南側に向いて下降し第Ⅲ層下部に暗灰黄～灰黄褐色砂混じり粘質土を介在する。北半部分のみ第Ⅲ層直下に弥生～中世の土器片を多く含む遺物包含層が遺存し（第Ⅳ層上部）、調査区の北側にのみ局所的により多くの遺物細片を含む黒褐色粘土の堆積（第Ⅳ層下部）が見られた。とともに上面では東西方向の耕作に伴う素堀小溝群を確認している。以下の層位では、調査区中央より南の第Ⅳ層直下に砂・砂礫と粘質土・粘土の互層堆積が続く河川状の堆積層が層厚約1.2m前後まで続いた。また南端では河道堆積の途中上位で東西方向の素堀小溝群を検出している。なお、調査区南端および北端では前記の第Ⅴ層が地山となるが、河川状堆積下面では黒色粘土・シルトが地山（基盤層）となっている。

2. 検出遺構

調査区の北側で柱列、中央～南側にわたって自然河道を検出した他は顕著な遺構の集中箇所は認められなかった。また、当遺跡の主体となる弥生期の遺物出土は見られたものの遺構の存在は当調査区では全く認められなかった。以下、主要遺構について概観する。

柱列 SA01

調査区の北側の第V層上面において検出した柱穴群である。いずれも一辺0.4m前後の隅丸方形もしくは不整形なもので深さも0.3～0.5mとまちまちであるが、ほぼ南北に直線的に並ぶことから一連の柱列として捉えられるものである。北からSA01-a、同-b、同-cとして遺構の掘削をおこなったが、SA01-cのみに礎盤となる板状木材と上面で根石と考えられる礎の出土が確認されている。遺物は各柱穴埋土より奈良・平安期の土器器細片が出土したのみである。時期については後述の自然河道との関連からほぼ平安期初頭頃と考えておきたい。

落ち込み SX01

調査区北側の柱列SA01の南側で検出した北東～南西にのびる不整形な落ち込みである。第V層上面で検出しているが実際には上部よりの窪みのようなものであったかもしれない。埋土は基本層序の第IV層下部の黒褐色粘質土と同質であり遺存の方向性も共通することから第IV層下部の堆積土の形成に関わるものと考えられよう。落ち込みの底面には大小の凹凸があり、砂混じりの土壤が介在して弥生～奈良・平安期の土器器細片を含むことから河川の氾濫に伴うと考えられるものである。こうした特徴から人為的なものではなく自然環境の変化に伴う遺構と考えておきたい。

自然河道 NR01・02

調査区中央より南側にかけて検出した自然河道である。南北幅約22m前後の幅で河道の所在が見られるが、途中に河道底面が隆起する部分があり、これ

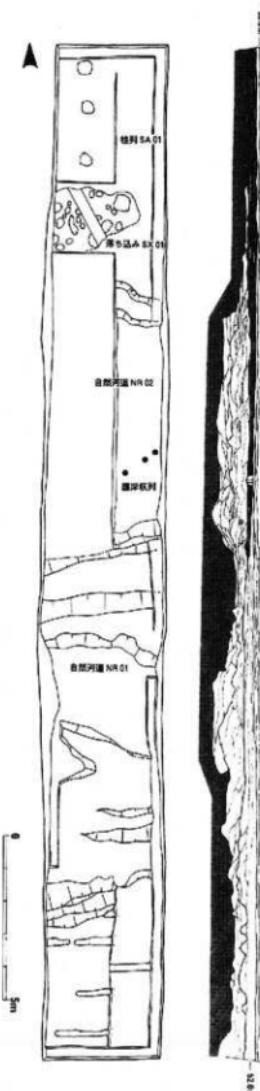


図3 調査区平面・土層図 (S=1/150)

を境に南側を NR01、北側を NR02 として個別の河道として検出、掘削を進めた。層位的な前後関係では、埋没時期で NR02→NR01 となるが出土遺物量とその内容ではいずれも弥生中期～古墳前・中期の土器片を含みつつも NR01 が奈良・平安期の土器類の出土が圧倒的に多く、NR02 では上部堆積中に奈良・平安期の土器が含まれるのみであった。こうした点から同時期に併存したものではなく個々の時期幅での河道の存在が考えられる。また、後出の NR01 の北岸付近では NR02 埋没後の上面より打ち込まれた杭列の存在を確認しており、護岸あるいは堤防状の施設が付随したこととも想定されよう。再度遺物内容について触ると、NR01 では多量の奈良・平安期の土器類が埋土下半の砂層に集中して含まれわざかに弥生・古墳時代の土器片を混在する状況であったのに対して、NR02 では NR01 下半堆積砂層と連続する NR02 南辺上部堆積にのみ奈良・平安期土器片の出土が見られ、以下の埋土からは弥生～古墳前・中期の土器片が主体となっていた。これら遺物内容と護岸杭列の在り方から考えて、実際には古墳中・後期までの河道 NR02 と奈良・平安期以後埋没した NR01 とが時期を隔てて北東～南西方向に流れていった状況が窺い知れよう。

なお、堆積層の内容的には NR01 の埋土上半では暗灰～褐色粘度ブロックや砂混じりの粘質土、砂、シルトで少量の平安後期～末の土器片を包含し、下半には白～灰白色の細砂～粗砂の堆積に多量の奈良・平安期土器片を含む。いずれも NR02 上部堆積層より連続して南に下降、傾斜した堆積層の流入により埋没したことが看取される。NR02 の上部では NR01 下部に統く黄灰～暗灰黄の砂礫～細砂・シルトの奈良・平安期土器片包含の堆積層が、下位ではそれ以前の土器を含む灰黃～淡灰・灰黒色粘土・細砂・シルトの互層から構成される河道堆積となっており数時期にもわたる河道埋没にかかる流入土壤の様相を呈していた。

III 出土遺物

第IV層（遺物包含層）、自然河道 NR01・02 等の遺構埋土より弥生～古墳中・後期および奈良・平安期、中世後期の遺物片が多量に出土している。そのうち主体を成すのは奈良・平安期の土師器・須恵器等の土器類、丸・平瓦の破片主体の瓦類等であった。なお、総出土量はコンテナ約20箱程度である。以下、各時期の遺物の概要を記し、図示した自然河道 NR01・02 より出土の奈良・平安期土器類の主要なものについてのみ概観する。

奈良・平安期以前の土器類

自然河道 NR01・02 の埋土や第IV層より弥生～古墳前・中期の土器が出土している。弥生土器では前期の微量な土器細片と中期以降の破片主体の土器があり、古墳前・中期まで時期的に連続する各時期の土器が出土している。古墳時代の須恵器はほとんど含まれず、布留式前半の範疇の土師器までが見られた。また、古墳後期では須恵質の円筒埴輪片が1点のみ出土している。

奈良・平安期の土器類

1～64は自然河道 NR01 埋土下半を中心に出土した土器類である。

1～36は土師器である。椀、杯、皿、鉢、高杯、甕等の各器種の破片が出土している。椀、杯、皿ではそれぞれに外面を丁寧にミガキ調整するものから削り、指頭圧痕を残す粗雑化したつ

平等坊·岩室遺跡(第17次)

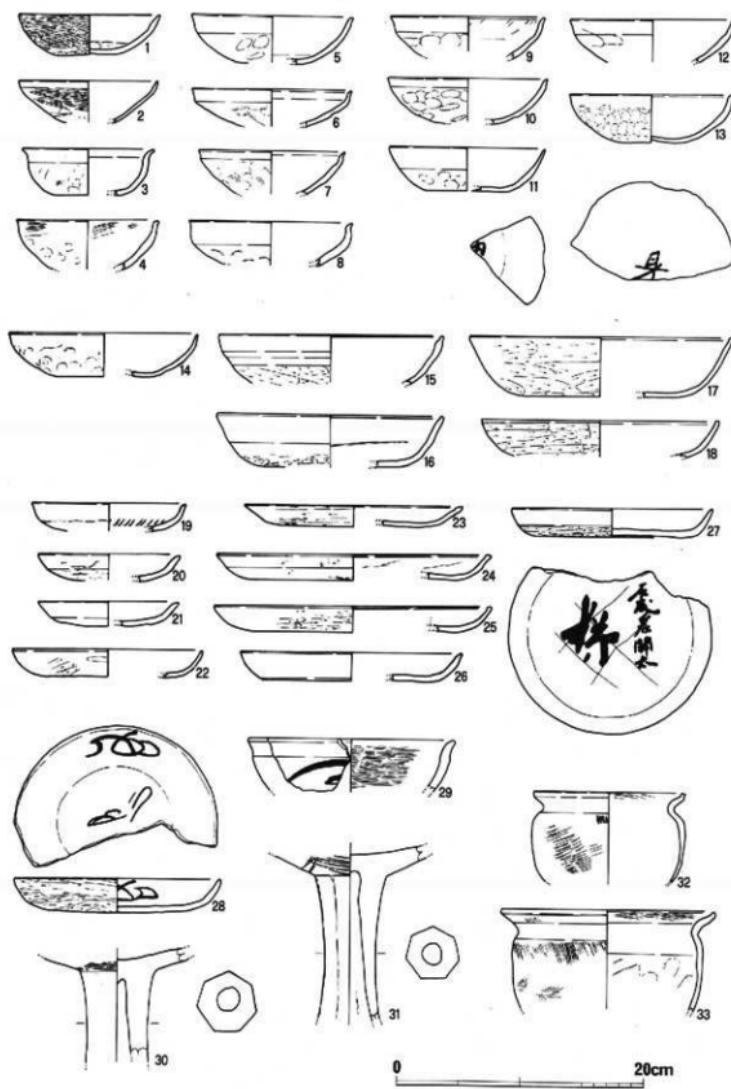


図4 出土遺物実測図1 ($S=1/4$)

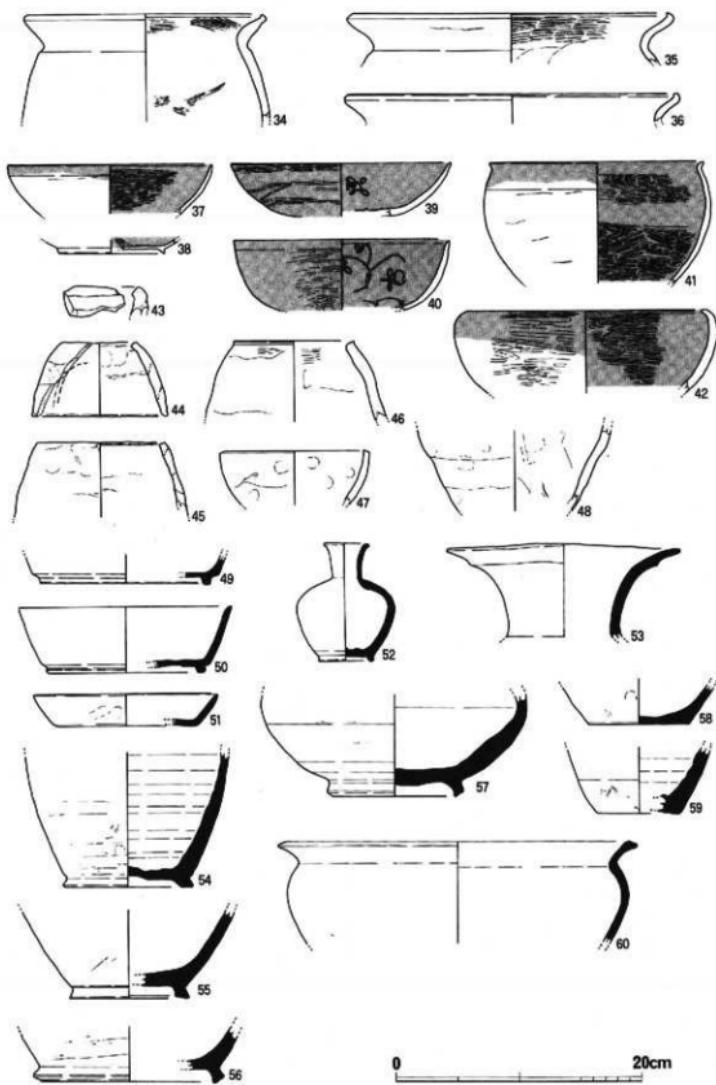


図5 出土遺物実測図2 (S=1/4)

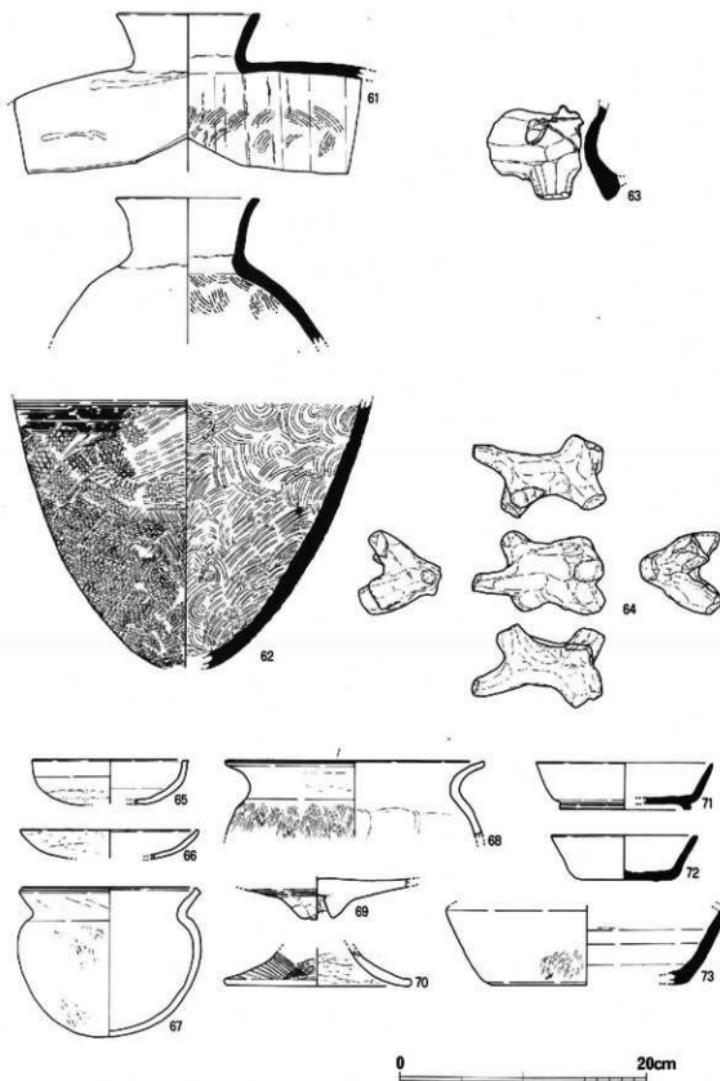


図6 出土遺物実測図3 (S=1/4)

くりのものまでを含んでいる。また、11、13、27 のように外面底部に墨書による文字を残すものや 28 のように口縁内側や見込みに崩し字か文様のようなものを墨書するものも見られる。29 の鉢の外面には人面墨書の施されるものもあり、後述のミニチュア土器類とともに祭祀行為に使用されたのであろう。30・31 の高杯は面取りにより断面多角形に仕上げた長い脚柱部に外面に連弧文状の暗文ミガキを加えたものである。32~36 の壺には小型から大型品までの大きさのものが含まれ、ともに口縁端を内側に折り返して突出あるいは肥厚させた形態で外面がハケ調整される壺である。

37~42 は黒色土器である。椀と鉢が出土している。37・38・41・42 は黒色土器 A 類、39・40 は黒色土器 B 類である。38 の椀の底部は口径の大きな底部に断面三角形の高台が付されたものである。また、39・40 の椀の内面には口縁付近および見込みに連続輪状文による暗文ミガキの装飾が施されている。

43~47 はミニチュア土器である。43~46 はいずれもミニチュア壺である。47 の椀あるいは鉢については、口縁端部が稀な形状を呈することからミニチュア土器として考えられよう。

48 の土器片の外面には二次焼成による赤色変化と器壁の剥落等が見られ、粗雑なつくりと形態から製塙土器片と考えられるものである。

49~62 は須恵器である。杯、壺には高台の有無による新旧の形態差が認められ、60 の大型鉢のような希少な器種も見られた。また、61・62 のような横瓶も見られた。

63・64 はともに土馬である。63 は須恵質の焼成による土馬の小片である。頭部と前脚の一部が残り削りによる面取り調整された外面には馬装を表現した線刻と粘度粒の貼り付けにより写実的に仕上げている。祭祀行為に際しては破碎後に廃棄されたものと考えられる。64 は精良な胎土の土師質焼成である。頭部および脚部を折損したのちに廃棄されたものである。

65~73 は自然河道 NR02 埋土上部より出土の土器類である。

65~70 は土師器である。杯、皿、大小の壺、高杯等がある。量的には NR01 の出土量に比べて極端に少ないものである。65 の杯は外面底部に指頭圧痕、66 の皿には削り調整が認められる。67・68 の壺では口縁端の形状と外面調整で共通の要素が見られる通有な壺である。67 の壺はほぼ完形で調査区東壁の河道埋土上部より検出している。69・70 の高杯には連弧文ミガキが杯底部および脚裾部の外面に施文されている。70 の脚裾内面には削り調整が明瞭に残る。

71~73 は須恵器である。71 は高台の付く杯、72 は回転ナデのみで底部未調整の小型杯である。73 は破片よりの復元であるが体部の形態より提瓶等の器種と考えられる。

以上 2 条の自然河道出土土器類ではともに奈良後半～平安前半期の土器片が出土しているが、主体を成すのは奈良期末～平安期初頭の時期幅に限定されよう。おそらく河道理没の時期は 10 世紀を前後する頃と思われ、遅って 8 世紀後半の奈良期後半には自然河道 NR01 が機能していたものと考えられる。従って同一方向で近接する自然河道 NR02 については弥生～古墳前・中期の先行する河道として考えておきたい。

V　まとめ

今回の調査では從来より知られる弥生集落に伴う遺構は全く確認することができなかった。しかししながら、弥生集落北辺における自然環境の変化と奈良・平安期までの土地利用の変遷について窺い知る材料が得られたことが成果となった。最後にこうした幾つかの点について列記し調査のまとめとしておきたい。

調査地近郊はこれまでの調査により弥生集落の環濠開郭部の北辺となることが知られ、地形的には第10次調査地と第8次調査地との間の今次調査地付近が南北両側の微高地間の低地帯であることが予想されていた。従って、低地部に北東～南西方向の流路が所在する点も納得できるものであったが、第10次調査地の南で同一方向の弥生中期以降の埋没河道が確認されており、今回検出した古墳前・中期以後埋没のNR02と平安前期頃埋没のNR01というように北側から時期が下るに連れて南の微高地側へと河道の移動、変遷が確認できた点が各時期の遺跡内の動向を考えるうえで重要な要素を提供するものとなった。

具体的には弥生集落終焉から古墳前期頃までにかけては集落域の大きな変化は自然河道NR02を挟んで集落北辺では認められないことが判明し、奈良・平安期の律令期の前後では第8次調査で確認した寺院（平等坊発寺）関連遺構群の北辺に自然河道NR01があり、これより北に寺院の展開が見られない時期から第10次調査区検出の奈良後期～平安前期の建物群までの拡がり（郡衙関連遺構群）の中に河道が取り込まれて護岸工事をおこない運河的な利用をおこなう段階までの時間的経過の想定材料となる点である。

調査では2条の自然河道と柱列以外に明瞭な遺構は見られなかったが、今後も調査地周辺の広域にわたる範囲において先述の時期変遷の実態について迫る必要がある。今後の調査の進展に期待したい。

2. 平等坊・岩室遺跡（第18次調査）－平等坊町

I はじめに

天理市の中央部に所在する平等坊・岩室遺跡は、弥生時代前期から後期、古墳時代にかけて展開する集落遺跡である。すでに21次におよぶ発掘調査からおびただしい遺構が見つかっており、弥生時代を通じて集落の周囲に大溝を巡らしていること、遺跡の北側を南西に蛇行する自然河川が流れていること、同じく遺跡中央部にも自然河川が流れていること、中央部の自然河川を挟んでその南側にも遺跡が広がっていること、最近の調査では弥生時代後期以降になると遺跡の北東部において区画大溝が出現することが判明している。

今回の調査は、遺跡の北西側、第8・12次調査で出土した大溝群の外側にあたる地点で、天理市平等坊町169-4番地の私道の拡幅工事が計画され、その事前調査を実施したものである。調査地点は、第6・17次調査によって集落の北側を南西に蛇行するように流れていた自然河川付近にあたるため、河川跡が出土するものと思われた。

調査期間は、平成8年11月19日から平成9年1月15日までを行い、天理市教育委員会文化財係の松本洋明が担当した。

II 調査の概要

市道の北辺を面積200m²にわたって拡幅工事が計画されたため、拡幅地点を幅2m、東西70mにわたり調査区を設定した。検出した遺構は、弥生時代以前より平安時代まで水の流れを検出した河川跡、弥生時代の大溝と土坑、中世の柱跡などである。

a、遺構について

自然河川

調査区の中央部付近から東側にかけて、自然河川跡を検出した。河川跡は北東から南西方向に流れる。砂礫層と粘土層が入り混じるもので調査区では、河川の西岸を検出したが東岸は調査区から外れていた。第6・17次調査を通じて遺跡の東側北西方向に流れる河川が判明していたが、今回の調査では河川が南西方向に蛇行している様子が理解でき、平等坊・岩室遺跡の北辺を北西から南西に大きくカーブを描きながら流れる幅広い河川が存在していたことになる。河川に伴う遺物には、上層において平安時代の遺物を伴うことから条里制が施行される以前の自然地形を示している。なお、調査では河川の底面まで掘り下げができなかった。河川の幅（規模）は調査区外に及ぶため定かでないが、第12次調査で検出した大溝遺構との位置関係から30~40m程と推測する。

調査区の西部では、河川跡の西岸より良好な基盤層が展開し弥生時代と中世の遺構が出土した。調査地点では、検出した河川の南東側に平等坊・岩室遺跡の中心部と考えられる居住地帯が展開しているが、今回の調査では河川の北西側でも微高地が展開し、弥生時代の遺構が広がっている様子が分かった。

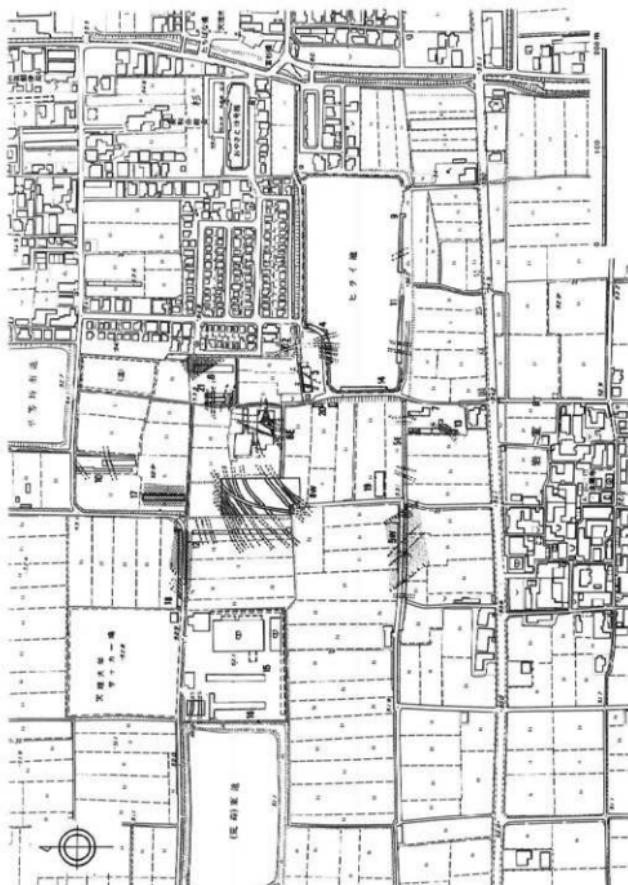
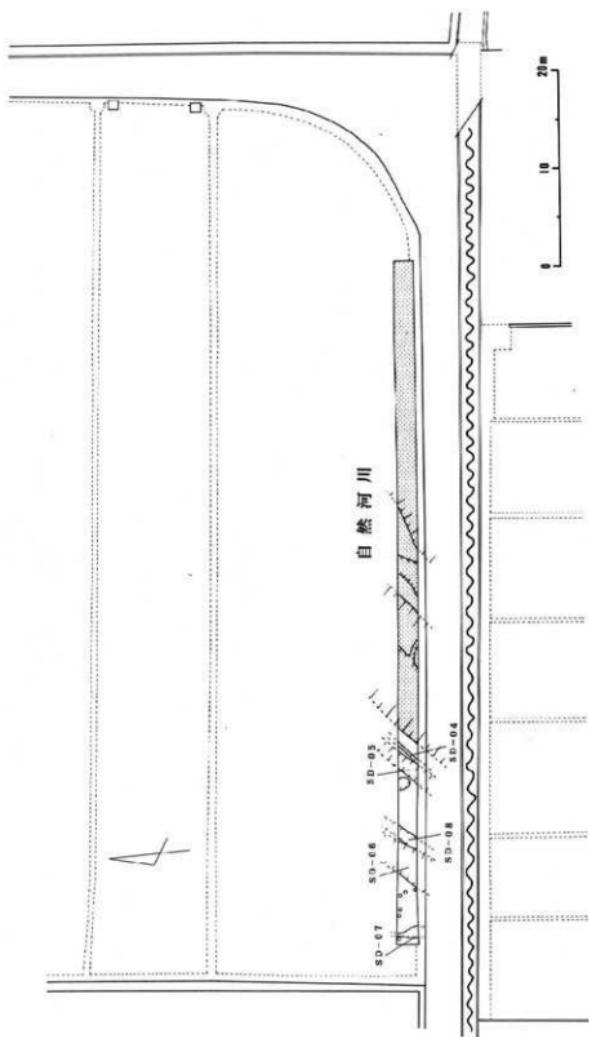


図7 平等坊・岩室遺跡、調査地点位置図
※ 数字は調査次数と地點を表す。

図8 調査区の位置と遺構出土状況平面図 ($S=1/500$)



弥生時代の遺構

調査区の西部から見つかった微高地地点から、幅4m前後、検出した深さ73cmのSD-06・08大溝と、幅2.5~3.5m前後、検出した深さ62cmのSD-04・05大溝を検出した。いずれも2本の大溝が重複して検出され、2条の大溝が一対で掘り込まれていたものである。SD-06と08は、SD-08をV字状に掘削したあとSD-08の埋没に伴って溝の西辺に逆台形状の大溝SD-60を形成している。同様にSD-04をV字状に掘削した後、溝の埋没に従ってその西辺にSD-05を逆台形状に形成している。おそらくは、2条の大溝が共に掘削され、掘り込みの断面形態がV字状に掘削したSD-04とSD-08、逆台形状に掘り込んだSD-05とSD-06がそれぞれ並行して存在していたと思われる。出土した土器の破片から前者のSD-04・08が弥生時代後期初頃に埋没し、後者のSD-05・06が弥生時代後期後半頃に埋没したと思われる。大溝は、南西~北東方向に延び自然河川の西岸に沿って掘り込まれていたと思われる。大溝を境に西側では明瞭な遺物包含層が認められ、弥生土器の破片が多数出土している。集落遺跡が展開すると思われる。また、大溝付近から弥生中期後半の土器一個体分が、まとまって出土した。他にSD-07溝を調査区の西端で検出している。弥生時代後期の土器破片が出土している。

中世の遺構

河川跡の西側で検出した微高地部分から瓦器を伴う中世の柱跡を検出した。柱の間隔は、1.9~2.5mで東西5間分の柱穴並びである。柱並びが条里制に見合うことから条里制施行後に伴う建物跡と考える。建物の形態は定かでない。

III まとめ

平等坊・岩室遺跡の北辺を流れる自然河川の様子が、調査で鮮明になりつつある。最も遺物や遺構が検出され、顕著な集落跡が想定されている遺跡中心部の北辺を北西から南西に蛇行する幅30~40mの自然河川がながれ、河川が蛇行する内側に大溝を区画した平等坊・岩室遺跡の居住地が展開していたものと思われる。第8・12次調査にかけて見つかった大溝群は居住地帯と河川との間に形成した濠跡と言える。調査では、河川の対岸にも微高地が展開し、弥生時代後期の大溝を検出した。そこには、2条の大溝が並行して区画され、新たに集落の存在が判明したわけである。過去には、第5次調査において平等坊・岩室遺跡の中心をなす居住地の南辺を南東から北西に流れる自然流路を検出し、その南側の微高地にも遺物包含層が広がっているなど、複数の立地条件から遺跡が構成されていることが指摘されてきたが、今回の調査でさらに複数の居住地が判明したわけである。

3. 嘉幡遺跡 - 嘉幡町

I はじめに

天理市の西部、嘉幡町に所在する嘉幡遺跡は、磯城郡田原本町の唐古・鍵遺跡から北方2kmに位置し、奈良盆地の中央部に立地する低地性の遺跡である。奈良県遺跡地図には、周知の遺跡であるが遺跡の特徴などは不明であった。近年、嘉幡町では国道24号線に沿って開発が進み立会調査を実施しているが、平成2年度には嘉幡遺跡の南方を東西に走る国道25号線の路肩工事に際して、古墳跡の調査を実施している。今回は、国道24号線の東辺、嘉幡町572番地において“いすゞ自動車株式会社”による検車工場の設営が計画されたため、業者の協力を得て発掘調査を実施したものである。

調査は、平成9年10月28日～11月16日までと、平成10年4月20日～4月24日まで2度にわたり実施した。

II 調査の概要

調査区の設定（図10参照）

調査地点は、国道24号線の東側、旧嘉幡北池の南に隣接した標高46mの耕作地である。工場用地の計画は、国道24号線の路面に合わせて盛り土造成を行うため、現状の地形より高さ2m程の盛り土を加え、その周囲をコンクリート壁で区画するものであった。コンクリート壁を構築する際には、その基礎構造が深さ1m、幅2mにも及ぶため遺跡への影響が予測された。よって、調査ではコンクリート壁を区画する造成地の周囲に調査区を設定したものである。

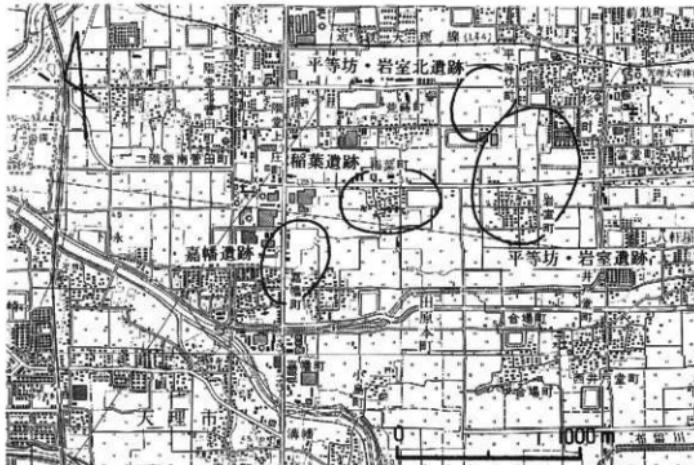


図9 遺跡の位置図 ($S=1/25,000$)

図 10 嘉幡遺跡調査区設定図 ($S=1/2,500$)

第1調査区：平成8年度の段階で造成が予定されていた北辺に沿って幅3m、東西35mにわたって設定した調査区である。北東から南西に延びる自然河川跡を検出、弥生時代中期及び古墳時代前期の土器が出土している。

第2調査区：第1調査区と第3調査区の間において、南北方向に沿って幅4～5m、南北17mにわたって設定した調査区である。第1調査区で検出した自然河川の東岸に沿って幅1m、検出した深さ50cm程のSD-01溝を確認した。また、SD-01溝の西側にも並行して同様なSD-02溝を検出している（第1調査区）。溝から古墳時代の須恵器など土器破片が出土している。

第3調査区：造成地の北東部、北辺に沿って幅2～3m、東西37mにわたって設定した調査区である。調査区の西半部では、弥生時代前・中期の土器破片を伴う黒色土の遺物包含層があり、出土量は少ないが弥生時代の遺跡が認められた。

第5調査区：造成地も南辺に沿って幅3m、東西80mにわたって設定した調査区である。調査区の西半部には、弥生時代前・中期の遺物を伴う包含層を検出した。また、調査区の西端付近では、弥生前期新段階の土器破片を伴う土坑など弥生時代前期の遺構も検出した。なお、造成地の東辺に沿って予定していた第4調査区の設定は、遺跡が終息するため中止した。

第6調査区：平成10年度に造成地の北側へ拡張するため、コンクリート壁の延長工事に際して拡張地区的東辺に沿って調査区を設定した。第1調査区で検出した自然河川跡の延長と思われる遺構と古墳時代の遺物が出土している。

自然河川と地形

調査では、第1・6調査区からおびただしい砂層堆積とそれに伴う地形的な落ち込みを検出した。造成地の西半には、北東から南西方向に延びる自然河川跡が存在した。調査では、自然河川のおびただしい砂層堆積とそれに伴う地形的な落ち込みを検出したが、河川の規模が大きく、発掘ではその東岸を確認しただけである。河川の対岸（西岸）は調査区外となった。河川跡から出土した砂礫の分析をしていないが、位置的には布留川の下流と推測する。河川跡の東岸には微高地があり、弥生時代前・中期、古墳時代などの土器破片を伴う黒色土の包含層が認められる。河川の東岸に沿って集落跡の存在が推測され、遺跡が立地していたことは確かである。

遺跡の様子

河川跡の東岸にある微高地から出土した包含層の遺物は、弥生時代前期末・弥生時代中期後半、古墳時代前期などの土器破片が目立ち、第5調査区では、弥生時代前期の土坑も検出している。川が流れる東岸に沿って集落が立地していたのであろう。また、第1・2調査区から検出したSD-01・02溝を検出している。この溝は、自然河川と同様に砂層が堆積し、古墳時代の須恵器などが出土している。また、第5調査区で検出したSD-03・04溝は、SD-01・02の延長と思われる。河川跡遺構の東岸に沿って、溝が掘り込まれていた。現在の耕作地形に北東から南西に延びる畦がり、調査で検出した溝と並行した関係を見る。SD-01・02溝と畦が位置的に近接することから、調査で検出した溝と畦との関係が興味深い。溝遺構からは古墳時代の土器が目立つようだが、条里水田の施行後に区画された溝跡とも考えられる。

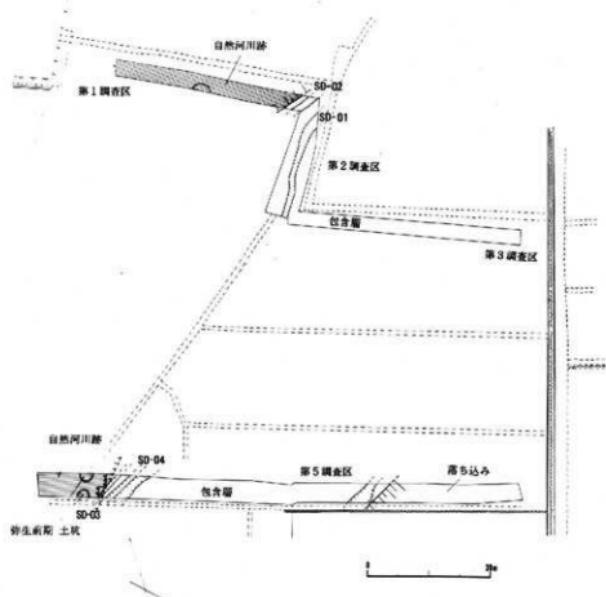


図 11 調査区と遺構の位置図 (S=1/800)

III まとめ

嘉幡遺跡の調査では、布留川の下流と考えられる比較的規模のある河川跡が遺跡の内部を北東から南西に流れ、その東岸に形成した微高地から弥生時代前期末、弥生時代中期後半、古墳時代前期の遺物包含層を伴い、河川の岸辺に立地した集落の存在が推測される。

嘉幡遺跡の北東 800m には稻葉遺跡があり、稻葉町稻葉池の護岸工事に伴う調査では弥生時代中期後半の遺物と共におびただしい砂層堆積が検出されている。また嘉幡遺跡の北東 1 ~ 1.5km に所在する弥生時代環濠集落の平等坊・岩室遺跡では、遺跡の内部を北西方向から南西方向に蛇行する弥生時代以前から平安時代まで流れをもつ規模の大きい河川跡の存在が判明している。嘉幡遺跡で検出した河川跡が、平等坊・岩室遺跡や稻葉遺跡で検出された河川跡と一連であることも推測される。

4. 別所遺跡(第3次) - 別所町

I はじめに

別所遺跡は天理市北部の別所町に所在する古墳～中世の複合集落遺跡である。地理的には天理市街地北方の豊田山から北に派生する丘陵と谷地形の末端に遺跡の立地が見られ、これまでに2ヶ所において発掘調査が実施されている。

今回の調査は既往の調査と同様に天理市立天理北中学校の施設拡充に伴い実施したものであり、昭和63年度の屋内運動場(第1次)および平成2年度の校舎増築(第2次調査)に引き続き平成8年度は武道場建設の事前調査として実施し、当遺跡における第3次調査となるものである。調査は現状で学校敷地の南東隅に位置するテニスコートの東半に東西6m、南北17mの調査区を設定しておこない、平成8年6月24日より開始し、同年7月19日にすべての調査を終了した。総調査面積は約102m²であった。

II 層序と検出遺構

1. 層序

今回の調査区における層序は以下に示したような状況となっている。(図14参照)

最上部の整地土層は現地表下約0.5m前後までに客土されたもので、上半はテニスコート、下半は運動場に伴う整地土であり、直下は旧耕作面となっている。これより下位では現地表下1.5

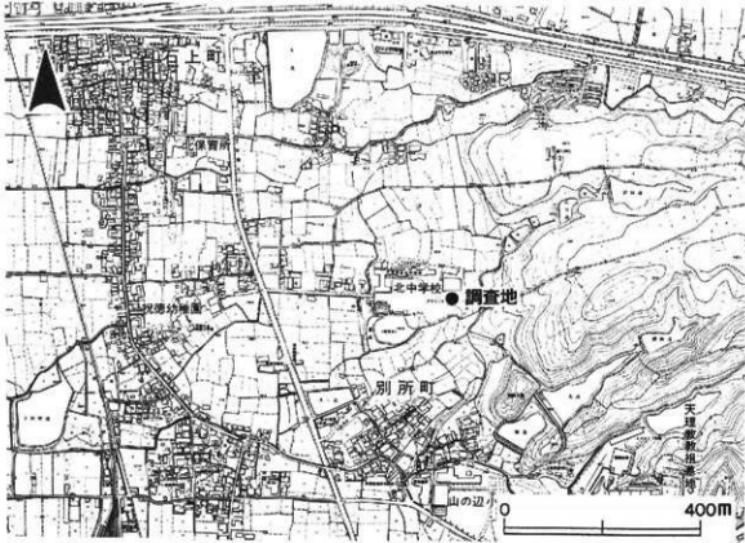
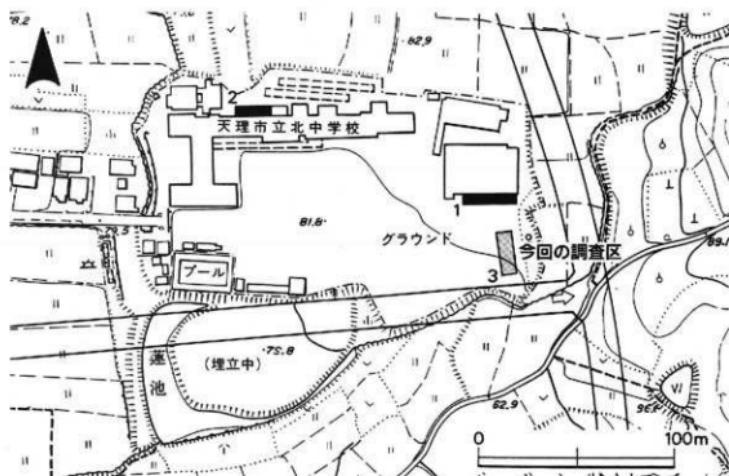


図12 調査地点位置図 (S=1/10,000)

図13 調査区位置図 ($S=1/2,500$)

m、標高 80.7m 前後で第VI層の地山となる。次にその間の層序について列記しておく。

第I層：旧耕作土（北壁1層・東壁1層）

第II層：床土（北壁2層・東壁2～5層）

第III層：中・近世遺物包含層（北壁3・4層・東壁6～8層）

第IV層：自然河道埋土上部（北壁5・6層・東壁9～13層）

第V層：自然河道埋土下部（北壁7～10層・東壁14～16層）

第VI層：地山（細砂を多く含む灰オリーブ色砂混じり粘土層）

2. 検出遺構

調査では、第I・II層以下で第III層の中・近世遺物包含層を介在して第IV層上面で耕作痕跡となる素堀小溝を検出したほかには明瞭な遺構検出面を確認することができなかった。第VI層地山面までの間には第IV・V層の砂、粘土、シルト等の河川あるいは谷状地形の埋積土壤が介在し完形、半完形の土器を含む土器片の包含が確認されることから調査区全体が低地形のなかにおさまることが考えられた。従って明瞭な人為的遺構は未確認ながらも北東から南西へと流れる自然河道の一部分を検出したことになる。

III 出土遺物

調査区内の各層より微細なものから完形に近いものまでを含む多くの土器片が出土している。総出土量はコンテナ約5箱程度であり、その大半は第IV層下部から第V層の自然河道埋土より出

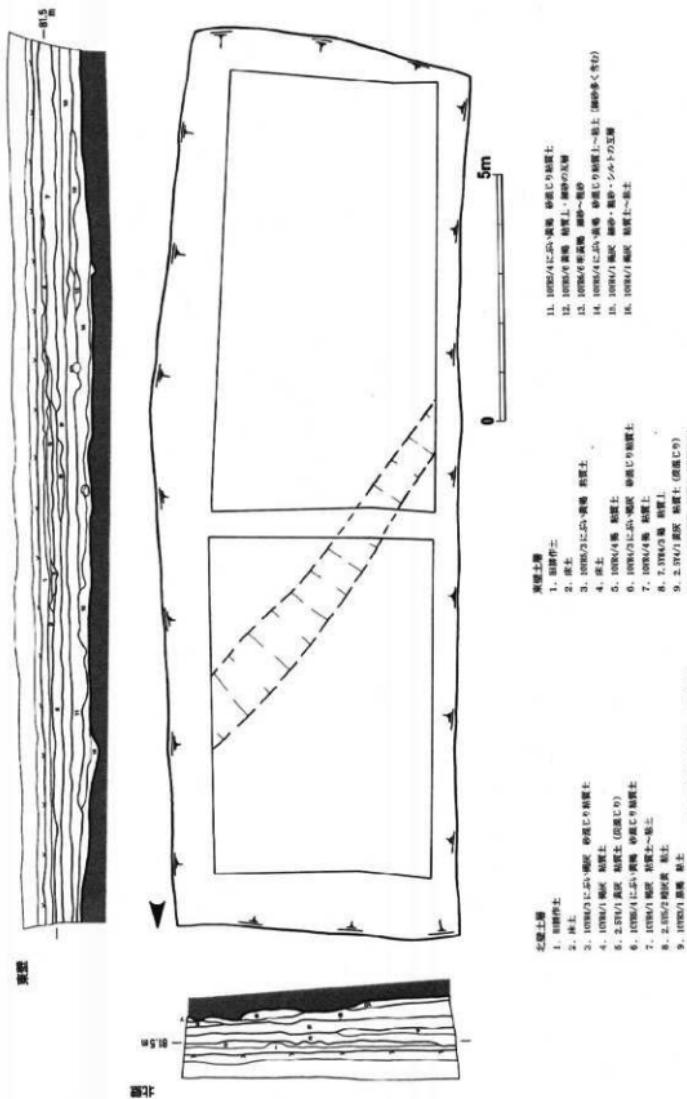


図14 調査区平面・土層図 (S=1/100)

土している。以下、図示したものについて概観する。

1は出土遺物中で最古相を示す弥生土器底部片である。底部底面には木葉痕跡(圧痕)が見られ、その部分的形態から弥生中期初頭頃の帰属と考えられる。器面の摩滅が著しく見られることから河道への流入によるものと思われる。第V層より出土している。

2~15は古墳中・後期~飛鳥・奈良期の土師器、須恵器等の土器類である。第III層出土の2の甕は口径25cm弱とやや大型品であり、外面に細かいハケ調整と内面に搔き取り様の工具痕とヨコハケが看取できる薄手のものである。後述の13・15の須恵器と同時期の律令期での帰属が考えられる。3の土師器杯は内外面の摩滅のため調整不明であるが、おそらくミガキ等による精緻な調整が施されていたものと思われる飛鳥~奈良期初頭の土器であろう。第V層より出土している。

4~7・9・10~12の土師器、須恵器は第V層出土の調査区中央付近に集積していた土器群を構成するものである。4の土師器鉢は杯部のみの破片である。外面には縱方向のミガキが残るが胎土から精製品とは言い難いものである。土器群中に混在していたものであるが若干時期の遅る古墳前期の帰属が考えられる土器である。5の土師器短頸直口壺は摩滅のため外面調整は不明である。内面には明瞭な粘土紐接合痕跡が残りやや粗製の土器である。6の土師器直口壺には外面のタテハケ、内面の板ナデが看取されるが、厚手の器壁や形態的に見ても時期特定の容易な土器である。7の土師器高杯脚柱部片と9の完形の土師器高杯は同形態と思われる。いずれも脚柱部外面にヘラナデによる軽い面取り調整と内面側に残る明瞭なしほり痕跡が特徴的である。また、9の杯部外面には接合単位に粘土帯を垂下させたにぶい棱が見られる点も特徴となる。8の土師器高杯は第V層下部の地山面直上で出土したものである。脚部のみ完存するので外面にヘラナデと指頭ナデ、内面にはしほり痕が残る。10は須恵器短頸壺である。外面底部付近を回転削り調整し、体部全体にはカキ目が施される。11は須恵器有蓋高杯の杯部片である。12の須恵器は短脚の脚部形態をもつもので脚付き壺の一部と考えられる。

13は調査区東壁の第IV層下部~第V層より出土した完形の須恵器壺である。体部に比べて口径の小さな短く外反する口縁をもち、球形の胴部形態を呈している。外面下半には格子目叩き、上半には平行叩きのちカキ目を施す、内面全体には同心円文当て具痕跡が明瞭である。14も須恵器壺である。端部を外側へ屈曲垂下させた口縁形態をもつ。第V層より出土している。15は須恵器横瓶である。全体に焼き歪みが大きく認められ、口縁部付近には焼成時に生じた亀裂が残る。第V層下部出土である。

16・17はともに基底付近のみ残る埴輪片である。16は埴質の焼成で底径の大きさから形象埴輪の一部と思われるものである。第V層出土。17もやや硬質な埴質で調整が明瞭に残るものである。内外面ともに一次調整のタテハケのみが見られるものである。第III層より出土。これらの埴輪は概ね古墳後期の帰属時期が考えられるものである。

なお、これら図示したものの他にも少量の丸瓦、平瓦片等の奈良・平安前期の瓦類も各層より出土している。

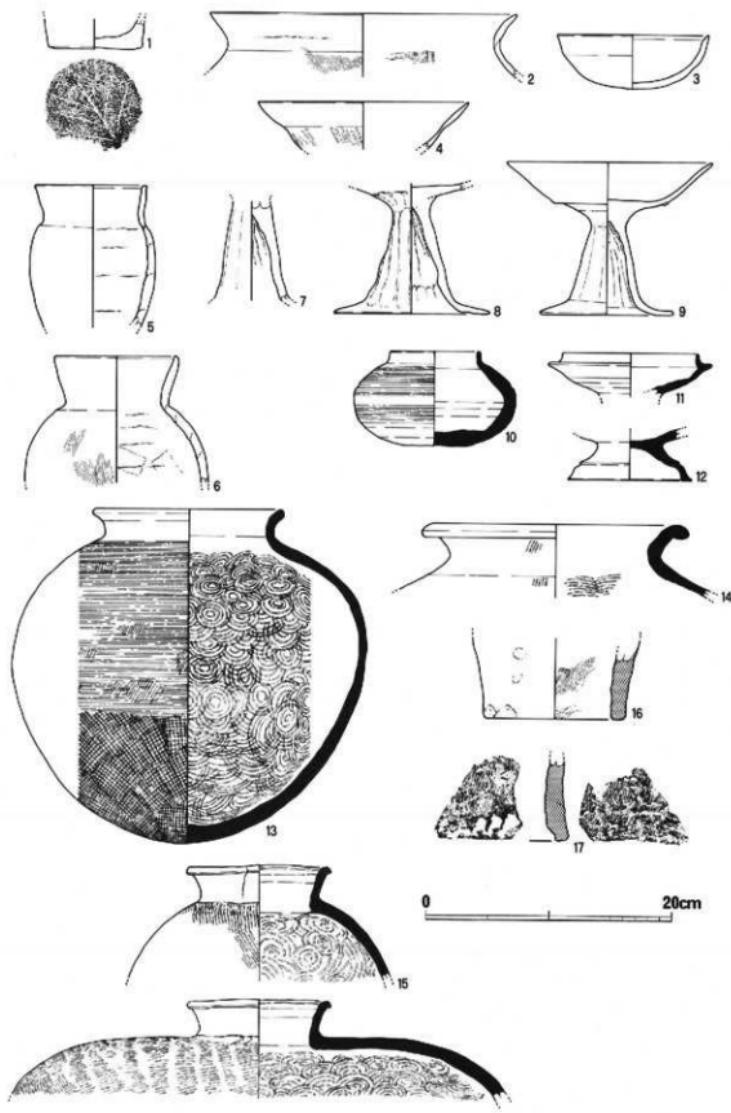


図 15 出土遺物実測図 (S=1/4)

IV まとめ

今回の天理北中学校内における調査では、明瞭な遺構を検出することはできなかつたが、北側に近接する第1次調査地で遺構に伴つて古墳中・後期と奈良・平安期の土器類の出土が知られることから、調査地付近がこうした居住域に接した自然地形の低地部に該当することがわかつた。低地部の地形は北東から南西に向けて傾斜するもので、先述の第1次調査地付近が丘陵上あるいは丘陵末端の微高地に立地するのに対してその南限となるべきものかもしれない。今回の調査地より南方では別所大塚古墳の位置する丘陵とその縁辺付近にまで谷地形の低地が続くため、調査事例の無い現状ではその間に自然河道を伴う低地帯の拡がりが想定される。従つて、遺跡の範囲は北中学校校舎の建ち並ぶ北側の部分に偏ることが考えられるため今後もこの近辺の開発行為に對して留意する必要があろう。

5. 小林古墳群 - 中之庄町

I はじめに

小林古墳群は天理市最北部の中之庄町に位置し、奈良市との境に近接して所在する小規模な後期古墳群である。今回の調査は、医療法人奈良東病院により特別養護老人ホーム新築工事に伴う造成工事が計画されたことを契機として、工事予定地内における遺跡有無確認の踏査の結果、対象地内に奈良県遺跡地図記載8-B-85古墳（方墳・一辺約10m）が所在したために事前の試掘調査を経て実施したものである。調査は前述の古墳周辺を対象に周辺における踏査と試掘調査を平成8年6月2日～6日におこない、原因者との再協議を経て同年9月12日～10月2日の期間に本調査を実施した。総調査面積は試掘と本調査を併せて延べ約150m²であった。

II 調査の概要

1. 試掘調査

対象となる方墳（8-B-85古墳）の周辺丘陵斜面地形に幅1mを基調とした調査区を3箇所に設定して古墳周囲における周溝等の有無確認に努めた。試掘調査区は西から現存する墳丘の正面

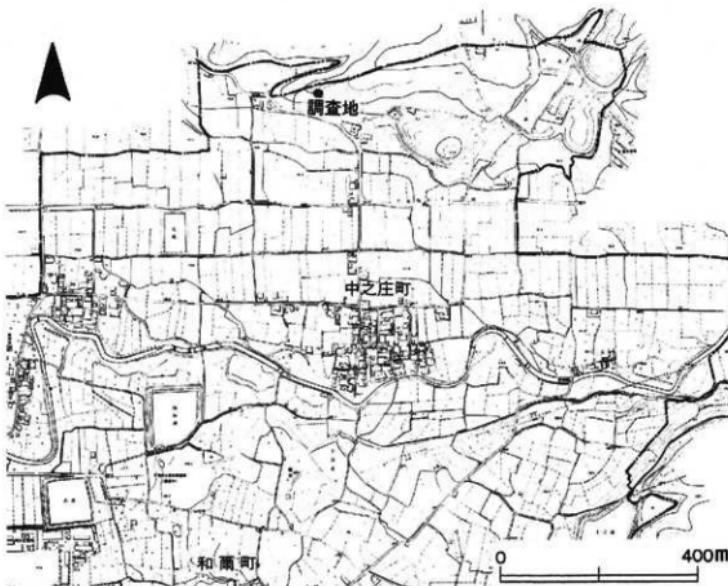


図16 調査地点位置図 (S=1/10,000)

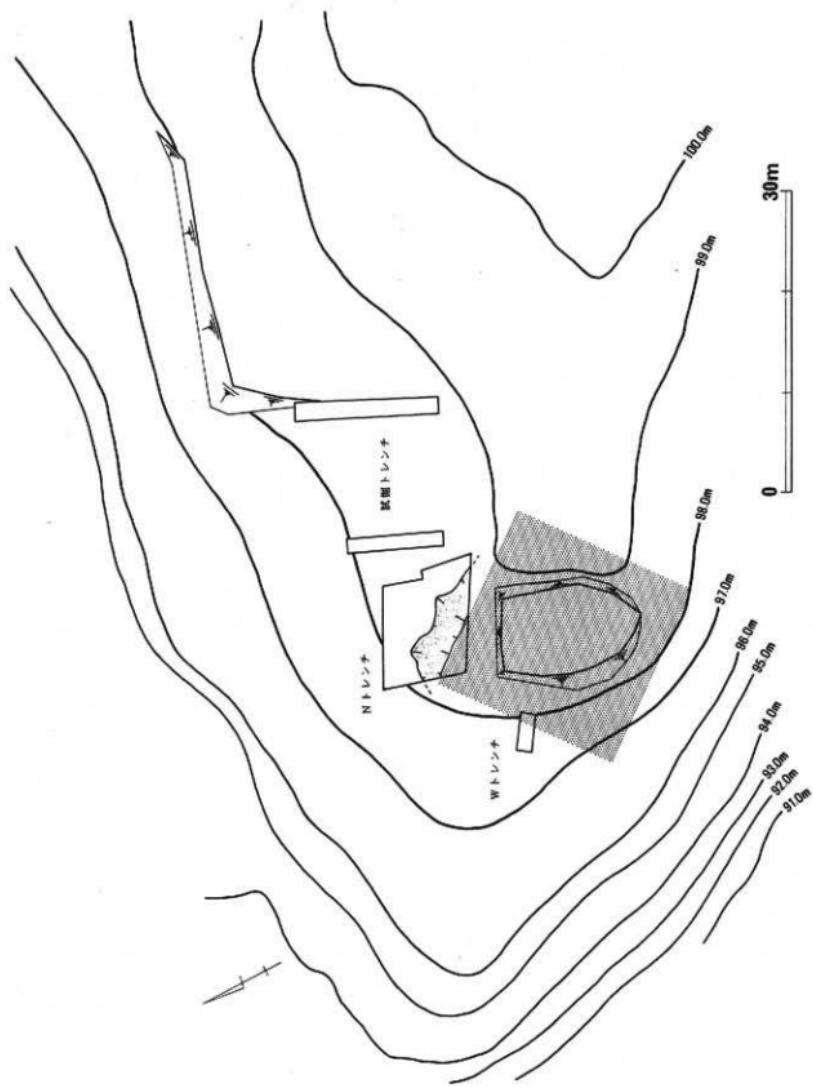


図 17 調査区および周辺地形図 (S=1/500)

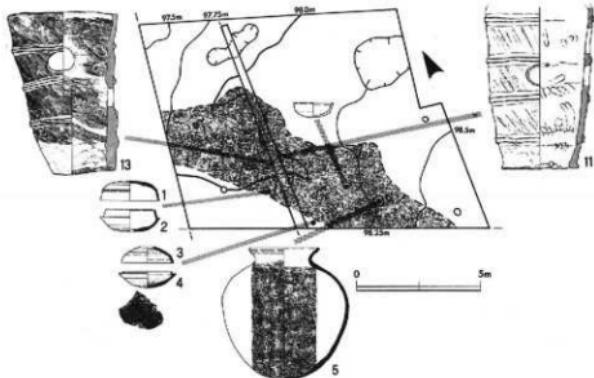


図18 調査区内における主要遺物出土位置（平面図：S=1/200・遺物図：S=1/6）

に第1トレンチ、離れて第2トレンチ、さらに東に第3トレンチを配置し掘削、確認を実施した。その結果、第2および第3トレンチでは現地表面下0.4~0.6mで黄色細砂混じり粘質土・粘土の地山面に達し、その間の間層における遺物の出土は全く認められなかった。残る墳丘前面の第1トレンチでは現地表下より下位に須恵器、埴輪片等を介在する間層と周溝相当の落ち込み埋土、地山面等を確認したため本調査の対象を墳丘前面のみに絞り込む結果となった。

2. 本調査

試掘結果を参考に墳丘南側前面に設定した試掘第1トレンチの両側を拡張して東西12m、南北8.5mの範囲で面的な調査を実施することになった。以下、層序と検出構造について列記し、調査の概要についてまとめておく。

層序については墳丘南側の緩斜面に平行した土層断面から図示したような状況で把握することができた。現地表面の腐植土層以下では、須恵器、埴輪片を含む間層が調査区の南北の範囲で広域に拡がりを見せ、墳丘裾付近ではその直下に墳丘盛土層を介在し、上面を法面とした周溝相当の溝状落ち込みが上面幅最大約3.5m、深さ（墳丘盛土との比高差）0.4m前後で遺存する。またこの下面では地山（基盤層）が拡がり、直上から周溝埋土周辺では小型で須恵質の朝顔形埴輪を含む円筒埴輪類の大きな破片が群を成して出土している。

地山面上では、他にも径20cm前後で深さ10cm程度の小穴が10基ほど検出されており、埋土に須恵器片や埴輪片を含むものもあるため埴輪列の樹立や墓前祭祀に伴う小穴もその中にあったことが考えられる。本調査区の北東隅付近には径2mの範囲で埋土にサヌカイト片や繩文時代の石器を含む黒褐色炭混じり粘質土の堆積した深さ15cmの浅い落ち込みを検出しており、先述の小穴中にはこうした繩文期の遺構となるものも含まれることが予想される。なお、主要な出土遺物の分布状況については平面図にその位置を記したので参照されたい。埴輪類の出土状況からは周溝に落ち込んだものが大半であると考えられるが、小穴に伴う須恵器については杯身と杯蓋の

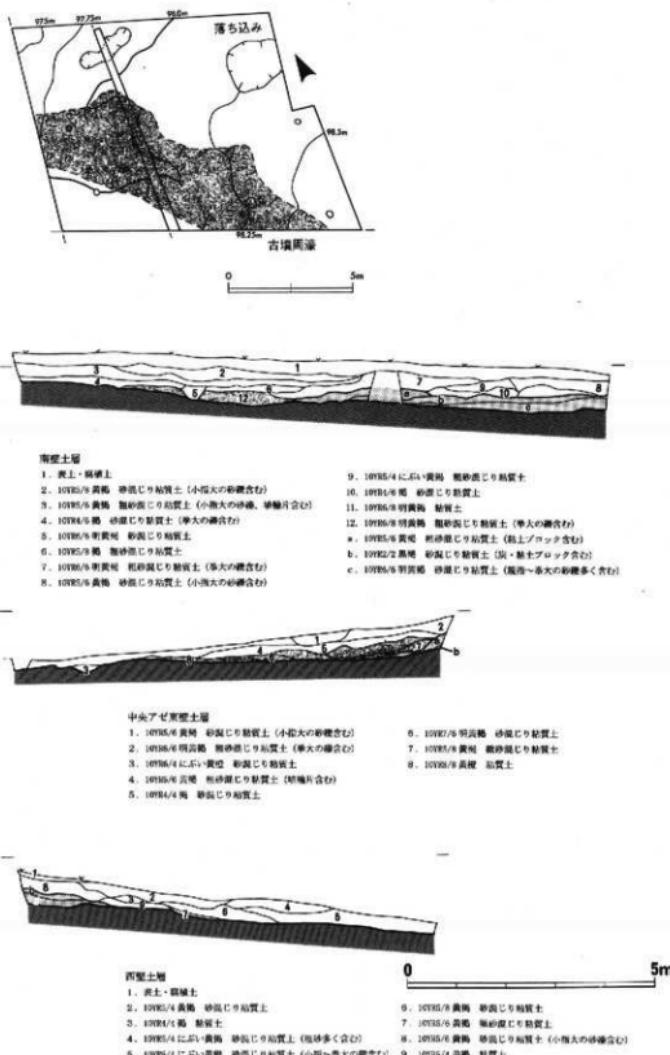


図19 調査区平面・土層図 (平面図: S=1/200・土層図: S=1/100)

セットと甕がともに完形に近く出土して伴うため墓前祭祀での使用を考えておきたい。

なお、墳丘の西側においても周溝の有無と墳丘裾の位置確認を目的とした幅1.5m、長さ3.5mの調査区（Wトレンチ）を設定して調査を実施した。しかしながら、木根による攪乱と後世の削平のため、表土下0.5m前後で地山面を確認、1基の時期不明の小穴を検出したのみで埴輪、土器等の出土も見られず墳裾を確認することはできなかった。

III 出土遺物

調査では周溝埋土および墳丘周辺の間層、流出土から土師器、須恵器、埴輪片等がコンテナ5箱程度の量で出土している。また、時期の遡るものに縄文期の凹基無茎石錐が1点のみ落ち込みSX01の埋土より出土しており古墳以前の遺跡の存在を知る材料となっている。ここでは古墳に伴うもののみ図示し、個々の遺物についての概観を記すこととする。

1. 土器類

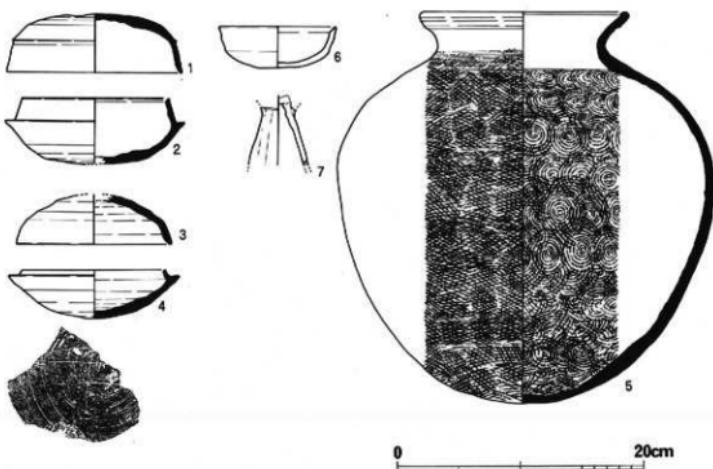
1～5は須恵器である。図示した杯蓋、杯身、甕のほかにも脚付き長頸壺や甕の小片も出土している。1・2は形態的に同時期で対を成す杯である。ともに体部と天井部の約 $\frac{1}{2}$ に回転削りが施される。1の杯蓋は口径14.2cm、器高4.7cmを測り、天井部と口縁部の境に突出した稜をもつ。口縁端の内面に明瞭な段はもたず端部は丸く仕上げられている。2の杯身は復元口径12.0cm、現存高5.3cmで受部最大径14.6cmを測る。口縁端と受部の形状はいずれも鈍く明瞭さを欠く丸みを帯びたものとなっている。これら一対の杯は6世紀初頭～前葉の時期幅に帰属が求められるものである。3・4の杯も形態、法量的に対を成すものである。3の杯蓋は復元口径12.6cm、現存高4.0cmを測る。外面全体に丸く、口縁と天井部の間に稜は見られない。4の杯身は復元口径11.8cm、器高4.0cmを測り、口縁の立ち上がりは短く先端は丸い。外面底部付近にはヘラ記号の線刻が見られる。3・4とともに6世紀後半～末に帰属時期の求められるものである。5の甕は墳丘裾前面で出土した破片により接合復元したものである。体部の一部を欠くがほぼ完存する。口径16.4cm、器高31.7cmを測る。外面には細かい格子目叩きのちカキ目調整を加え、内面には同心円文當て具痕跡を残す。

6・7は土師器である。土師器の出土は少なく、図示したものも含めて5点ほどである。

6の杯は口径9.6cm、器高3.3cmと小型品である。精良な胎土で明赤褐色の色調を呈する。内外面ともにナデ調整により仕上げられている。7の高杯脚柱部片も明赤褐色の精良な胎土の土器である。現存高5.4cmを測り、外面タテヘラナデ、内面にしづり痕のみが残る。杯部との接合部分で分離した脚柱部のみの破片であるため全形は不明である。

2. 墓輪類

埴輪片の出土量は多く、図示したもの以外にも形象埴輪の一部と考えられるものも出土している。焼成についてはほとんどが須恵質のもので占められている。また、焼き歪みの見られるものが多く、全体として小型化した埴輪が主体となる。出土埴輪類全体の印象としては円筒埴輪には3条4段構成で器高40cm前後のものが通有であり、この構成の上部に壺部の付加された朝顔形埴輪が加わるようである。

図 20 出土遺物実測図 1 ($S = 1/4$)

8・9は朝顔形埴輪の壺部口縁および頸部の破片である。8の口縁部外面の突帯直下には線刻による連続した斜線の装飾が見られる。9の壺部頸部付近には断面三角形の突帯を巡らす。10～13の埴輪では、低く不整形な突帯、対向位置で穿たれた円形透かし孔の存在、調整面での外面一次調整タテ・ナナメハケ等で共通点が認められ、基底部付近や内面の調整等での小差が見られるのみである。10の基底部片には二段目に不整円形の透かし孔が認められ、他の埴輪とは異なる印象を受けるものである。衣笠等の器財埴輪の基部となるものかもしれない。11は上端欠損部が内湾する点から朝顔形埴輪であることが知られる。12の口縁部付近も3条4段の同一構成の規範に見合ったものと思われる。13はほぼ完存するので器高39.5cmを測る。内面にはヨコ・ナナメ方向の粗いハケ、板ナデが施され、基底部付近では外面に板ナデ、内面に指頭ナデ調整が施される。また、基底の端面には細かいナナメハケが見られる。2段目および3段目に円形透かし孔が対向位置で穿たれている。

IV まとめ

今回の調査では古墳に伴う土器、埴輪の出土と北側周溝の存在から当該古墳の墳形と築造時期を知る手掛かりを得ることができた。墳形については遺物の分布状況や周溝の平面プランから從前より考えられた方墳と考えておきたい。築造時期については土器と埴輪の年代観からほぼ6世紀前半と考えられ、出土土器に二時期の偏りがある点から複葬あるいは墓前祭祀が6世紀後半～末におこなわれたことが推測されよう。

墳丘周囲では本調査にかかる北側以外には開発行為が及ばないため明確な墳丘規模と形状を確

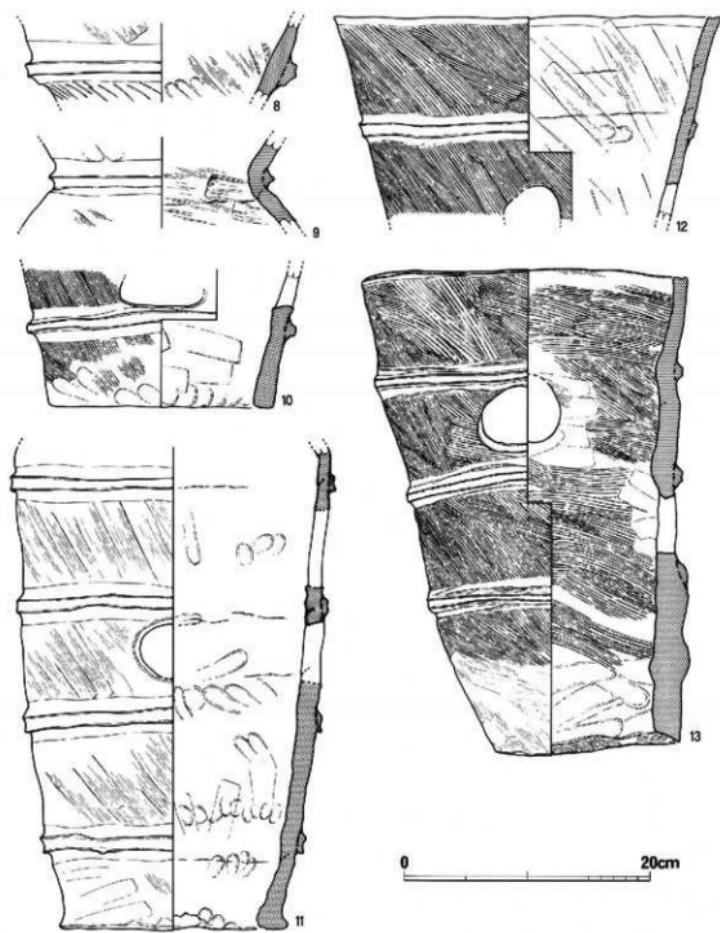


図21 出土遺物実測図2 (S=1/4)

小林古墳群

認することはできなかつたが、調査では丘陵に沿う墳丘西側に削平による破壊が及ぶことを確認している。また、現状の墳丘周囲の地形が著しく改変されているため現状では不明な点が多い点も否めないが、調査の成果から遺跡地図記載の規模よりは若干大きくなるものと考えておきたい。

なお、当該古墳の内部構造については現状では不明であるが、出土遺物の時期から見て小型の横穴式石室を埋葬主体部とするものと考えられよう。現存する墳丘も低平な土壇状を成し、本調査で二時期にわたる初葬と追葬に伴うことが予想される土器類と周溝に転落した埴輪の出土が見られる点からすでに石室の破壊と墳丘の削平が進んだ状態であるものと考えられる。

最後に、今回調査を実施した周辺の丘陵では同様に小規模な古墳の分布が知られており、今後も開発行為に際して留意すべき地域である点を強調しておきたい。

6. 中町遺跡－中町、南六条町

I はじめに

トーメン不動産株式会社は、天理市中町176-1番地他、南六条町572番地において大規模住宅開発を計画された。このため、天理市教育委員会との間で文化財の取り扱いに関する事前協議がもたれた。そして当該事業地が周知の遺跡であることから、試掘調査を行なって遺構の確認を行なうことが決定された。

試掘調査は第1次調査として平成8年7月23日～同月30日の期間に実施し、第2次調査として同年12月9日～16日に実施した。

試掘調査では第7トレンチにおいて中世の溝と井戸、土壌などが検出された。このほか事業地の西端付近では古墳時代の須恵器片、土師器片を含む包含層が確認されたが遺構としては確認されなかった。この他の調査区では遺構と遺物はほとんど出土していない。

この結果を受けて本調査は、第7トレンチについて発掘を実施するすることが決定された。調

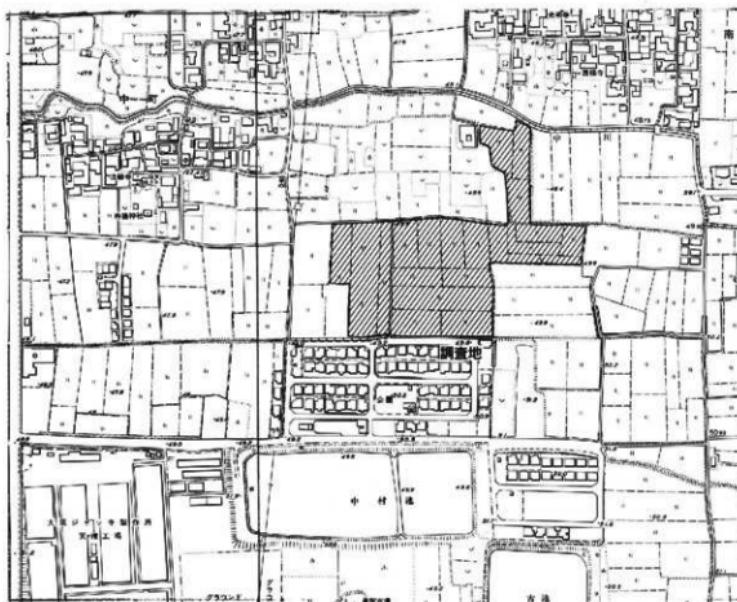


図22 中町遺跡と調査地

査の実施は平成9年1月7日～2月21日までである。開発面積は24,890m²、調査面積は約500m²である。

II 調査の概要（図24）

古墳時代溝（SD 01）

調査区の東北から南西方向へ斜めに流路を持つ人工溝である。南西側では溝底が検出面に出てしまっているが、東北側では約20cmほどの深さで残存し東北方向への流れであると推定される。幅は約80～90cmである。

SD 01からの出土遺物は須恵器高杯、杯などと土師器破片であるが全

体的には少量である。時

期は6世紀中ごろであろう。北側で設定した第6トレンチではSD 01は検出してないため調査区より外側では東へ流路を変えているものと思われる。このほかSD 01と同一方向の溝を4本検出しているが、遺物を伴っていないため時期は不明である。

建物跡1 調査区の北側で検出した。柱の掘方のみで東西4m（2間）と南北5m（3間）の規模を有する。東側には隣接して同一規模の柱列が見られる。桁方向がほぼ南北をさしている。立て替えた柱列に該当すると推定される。出土遺物はなく時期は不明であるが、付属する井戸などにより室町時代の建物跡であろう。

井戸跡（図25 SE 1～3） 井戸跡は曲げ物や井戸枠が残存していたものが3カ所である。

SE 1は掘方上面の大きさは東西2.8m、南北2.5mの楕円形を呈し、二段掘りで下部は直径1.6mの大きさである。深さは1.8mである。底部には南側に偏して曲げ物が残存しているだけで、井戸枠などは転用のため抜かれていた。出土遺物は埋め土上面で瓦器碗、土師器などが出土したが、下部からは出土していない。

SE 2は掘方は方形を呈し東西2.1m、南北1.6mである。井戸枠は上部が縦板横棟組で東西85cm、南北70cmの規模である。この下部には直径70cmと60cmの曲げ物の井戸枠が作られている。深さは2.2mである。出土遺物は埋め土上面で瓦器碗、土師器、瓦質土器片など出土しているが、底部では出土遺物は見られない。

SE 3は掘方は方形を呈し東西1.8m、南北は試掘トレンチにより破壊された。井戸枠はSE 2と同一のタイプの縦板横棟組で、東西60cm、南北50cmの大きさである。深さは約1.3mであ

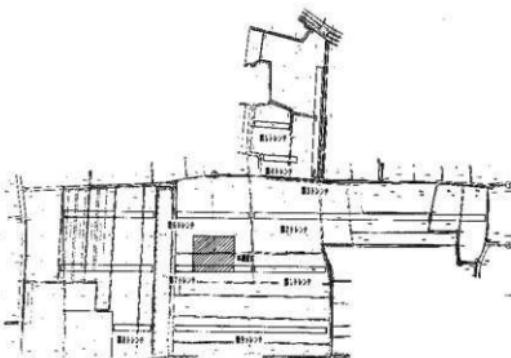


図23 試掘調査トレンチ配置

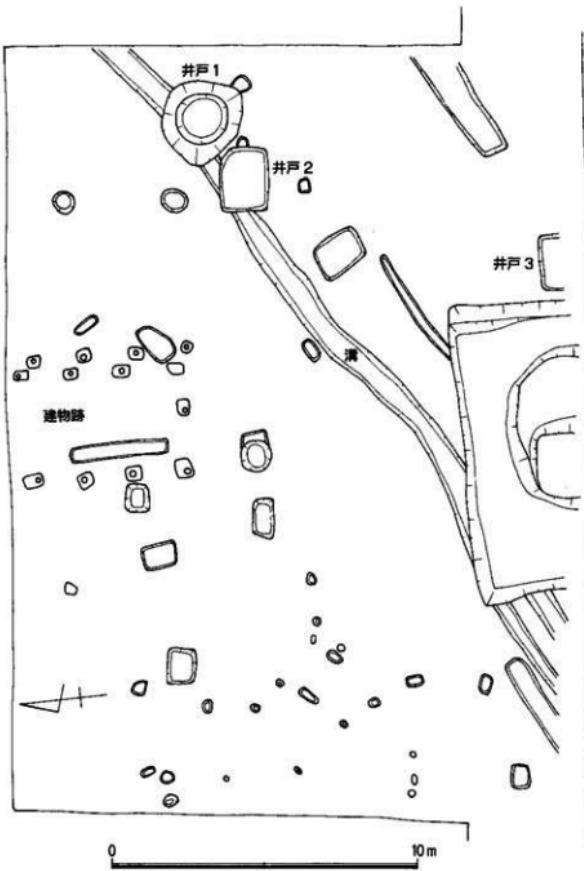


図 24 遺構検出状況図

る。出土遺物は土師器片など少量であった。

この他土壙は大小取り混ぜて 40 カ所を検出している。このうち直径 70~90cm の円形土壙は 3 カ所で検出しているが、深さが 1 m 前後あり小規模な井戸跡と推定される。また南では方形の掘方中央に地山を削り出した島状の高まりがあるもののどのような性格の遺構であるかは不明である。

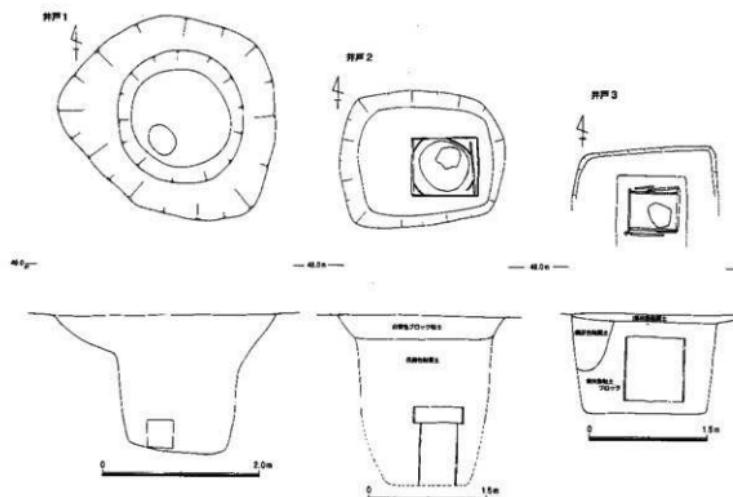


図 25 井戸跡 1~3

III まとめ

調査区では古墳時代の遺構は溝のみである。人工溝として掘削されていることがうかがえる。事業地域の西側では同一時期の土器が出土するものの遺構が確認されない。恐らく浅い遺構は後世の開発などにより破壊された可能性が考えられる。

室町時代の遺構は、建物跡1、井戸跡3、溝などである。建物跡は小規模な掘立柱建物である。この地点より南300mでは室町時代を中心とする小路遺跡が所在し、また北側100mでは周辺の水田より高まりを持つ地形が観察される。ここでは土器がかなりの量で散布している。恐らくこの地点も中世期の屋敷地であった可能性が高いのである。

7. 石上神宮境内地遺跡 - 布留町

I はじめに

天理市布留町 384-1 の石上神宮境内地にある、旧社務所の改築に先立つ発掘調査届けが石上神宮から提出された。改築が計画された建物は、本殿や拝殿建物を囲む回廊の外側で東に位置している。東側面は高さ 2 m 以上の石垣により造成された地面に建築されていることから、もとの地形は急斜面であったことがうかがえる。昭和 14 年ごろまでは社務所として使用されていたようである。

調査は平成 8 年 11 月 18 日の建物解体作業から立ち会いを行ない、12 月 4 日には全ての調査は終了した。調査面積は約 232 m² である。出土遺物は土師器皿、鉄釘、銅錢などコンテナ収納箱 1 箱分である。

II 旧社務所について

明治 7 年の社殿配置図によると、本殿、拝殿を囲む回廊の外側の東には、社務所が配置されている。この建物が改築の対象となった。寛政 7 年（1795）の『和州山辺郡布留社頭并山内絵図』によると、この回廊の東側には南に門を開く土塀と、中に 2 棟の建物が描かれている。西側の建物は「法華堂」の名称が付されているが、東側の南北に細長い建物（2 間 × 4 間）は名称が明らかではないが、瓦葺きの建物であったことがわかる。「法華堂」の示すところから仏教建築であり、石上神宮の江戸時代後期の神仏習合がわかる資料である。



図 26 石上神宮境内地調査点

このような南北に細長い建物が描かれている絵図はもう1枚存在する。年号は書かれていないが同じく4間×2間の建物で平側は障子と縁側が書かれ、屋根は藁あるいは草葺きの表現がみられる。このように2種類の絵図から屋根部分と縁側回りが変化しているが、これだけでは新旧の判断はできない。いずれにせよ明治期になって「法華堂」は廃れてしまい、南北建物は社務所として存続したものであろう。

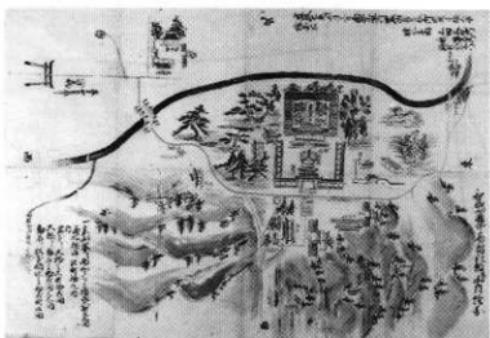


図27 寛政7年（1795）和州山辺郡布留社頭并山内絵図

III 調査の概要

旧社務所の調査は上屋を解体して東石の状態の把握から開始した。これにより柱通りの東石は平側で4間（15m）、妻側で2間（6.5m）の規模が確認された。図面で示したのは台所など南側の最近の増築部分については除いている。

図面によっても明らかなように柱の通りが悪く、実際に東柱が接していないかったり、石の変わりに角材が使われていたりしている。これは床部分について大幅な改修があったことをうかがわせる。しかし、全体の規模は江戸時代後期の絵図に描かれている家屋の規模を踏襲していると判断される。

東石をすべて取り除いた後、現状での床面を精査した。この結果、13カ所の小土塹、便所跡、床面上での焼け跡などを検出した。また樹の切り株なども検出した。床面自体は北側で10cm程度の整地土が入れられているものの、大半は概ね地山を整地した床面であると判断された。

IV 検出遺構

土 塹（地鎮土塙） 建物南側の棟持ち柱の直下に位置している。方形土塙で規模は東西50cm、南北53cm、深さ12cmである。出土遺物は鉄釘3片、土師器皿2点である。皿は1点は完形品であるが、他は3片になり接合するもの欠ける部分がある。恐らく埋める前に割られたことが推測される。

便所跡 建物の東端で石垣に接して検出した。一つは甕が埋められ直径55cm、深さ47cmである。内容物はまったくなく臭気もない。埋め甕の北には土管が伏せられこの端は石垣の外側に口が出ている構造である。この2カ所で大小便用としたのであろう。これにより便所と石垣が同

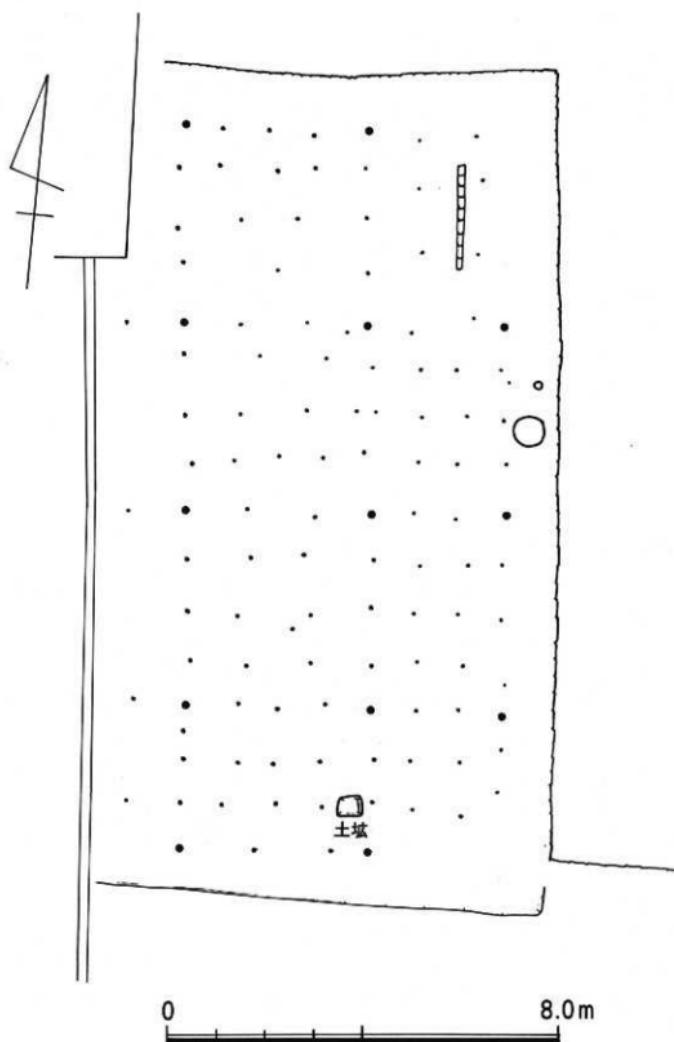


図 28 建物解体後の礎石列と検出遺構図

時期の施行であると判断されるが、寛政7年の絵図には石垣の表現は見られない。

丸瓦列 建物東北部で丸瓦を10個ほど南北方向に並べている。ただ溝状にはなつておらず暗渠排水溝ではないようである。

樹根の切り株 建物の北側において樹根の切り株が放置されていた。直径が3mにもなる大きなもので、恐らく最初の建物の造成に際して切られたものであろう。草葺き屋根を描いた絵図には建物の周辺に樹木が描かれているが、瓦葺き建物では樹木がないところから、瓦葺き建物への改築の際に伐採されたことが推測されよう。

V 出土遺物

地鎮土壇の出土遺物のはかに、床面精査により銅鏡6点（寛永通宝5点、紹聖元宝1点）、土師器皿10点、瓦破片少量と禁足地を囲んでいる瑞垣石の破片である。下半部が欠けているが「布留」まで読み取れる。ここでは転用材として東石に利用されていた。瑞垣が石製になるのは貞享2年（1685）以降とされ（註）、このことからも、この建物が瑞垣石列より古くならないことは明かであろう。

VI まとめ

以上旧社務所の調査について概要をまとめておきたい。

1. 建物の敷地は地山を整地して東法面に石垣を積んでいる。この部分で旧地形は崖状になっていたことが推測される。
2. 旧社務所建物は改修をうけつつほほ江戸時代後期まで規模を踏襲していたようである。出土遺物からは建物が中世の時期まで遡る可能性はないようである。
3. 2枚の絵図を参照すると草葺き屋根から瓦葺き屋根へと変遷している。
4. 地鎮土壇と推定される遺構は1カ所確認された。

注1 白井伊佐幸『石上・大神の祭祀と信仰』 1991 国書刊行会

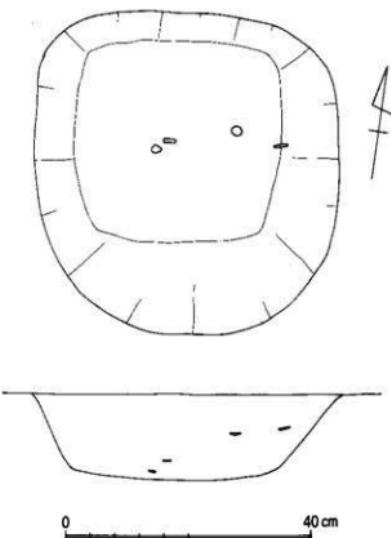


図29 土壇1 実測図

8. 下池山古墳隣接地（遺物散布地）－成願寺町・中山町

I はじめに

下池山古墳に隣接した散布地での調査は、天理市成願寺町5-1と中山町230-1で互いに隣接した場所である。当地は産廃の焼却施設の建設による調査であるが、文化財行政の指導の遅れにより一部は建設後の調査となった。

調査地は成願寺町5-1（No.1地区）で957m²である。平成8年5月14日から17日にかけて調査を行ない、中山町230-1（No.2地区）では585m²で同年6月3日に調査を行なった。後者の部分については小面積の調査となった。

II 調査の概要

No.1地区は西側の水田部分が対象地である。下池山古墳と調査地の関係は古墳前方部の南側が西に流れる水路（中筋川）により前端部が切断されたような状況にある。この地点から南側の水田が今回の調査対象地となるが、水路と水田では比高差が1m以上あって、現状では前方部が水田部分まで伸びていたことはうかがわれない状況である。

調査は水田のほぼ中央に東西3.8m、南北18.6mのトレンチを設定して掘り下げを行なった。表土下約50cm（5層）にて遺物が散見されたため、この面で遺構と遺物の検討を行なった。この面はトレンチ全面において砂礫が検出され、住居跡などの遺構が形成される基盤ではないと推

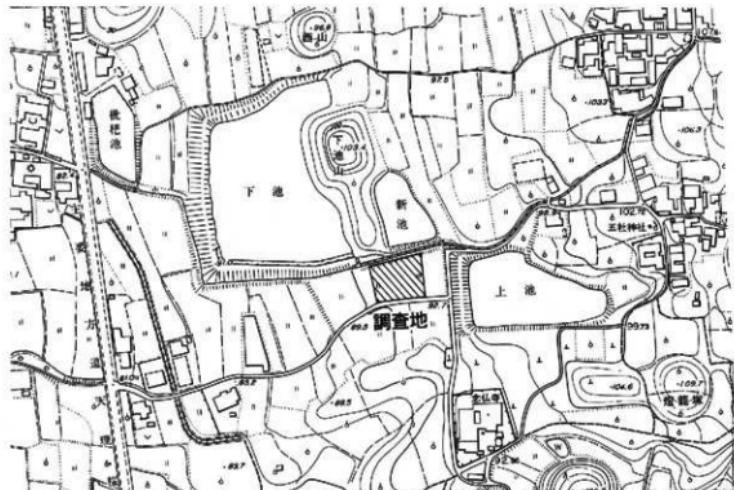


図30 下池山古墳隣接地（遺物散布地）調査地

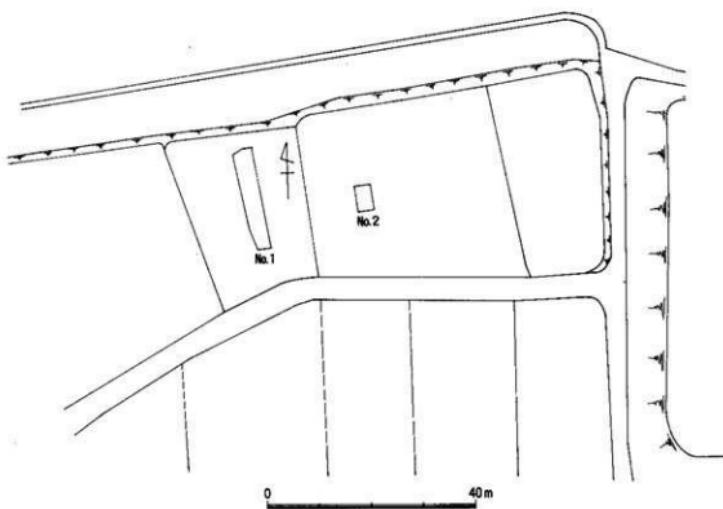


図31 調査トレンチ配置図

定された。遺物については北から1mごとに区画を設定して取り上げた。この結果調査区全域において土器破片が出土するようである。しかし土器の状況は小破片ばかりで摩滅が激しく、上流側から流されてきたような状況を呈している。

土器の種類は陶器片18点、土師器片35点、擂り鉢片5点、羽釜片4点、瓦質土器片10点、須恵器片1点の合計73点である。以上のように見ると5層の最終堆積は江戸時代後期ごろと推定される。

5層以下の状況を見るためにさらに掘り下げを行なった。5層は約60cmの堆積があり、この下は6層として30~40cmの白砂層が堆積している。この中から土師器片3点と擂り鉢片4点、漆塗り木椀片1点が出土した。陶器片が出土していないところから、この層は中世期の堆積を示していると推定される。7層は70~90cmの厚さで茶褐色粘質土が堆積している。この層は有機質に富むが遺物は出土していない。この層について花粉分析を行なった。

これより下部は灰青色微砂土のシルト層となり地山と判断された。ここまでは表土下約2.3~2.5mの地点である。

以上のようにNo.1地区では地山面までは良好な基盤面がなく、谷地形に形成された小規模な砂を主とする堆積土が検出されたにすぎない。また、下池山古墳前方部がこの調査地まで及んでいたとする積極的な構造、遺物は確認できない。

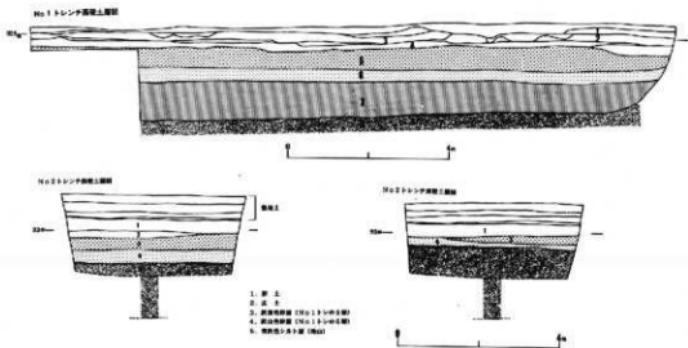


図 32 No. 1 地区土層図

No. 2 地区の調査は No. 1 地区調査地の東側にある。東西 3m、南北 5m のトレンチを設定した。ここでは表土下約 60cm が整地土であり、この下で水田に伴う耕作土を検出した。そして約 90cm で灰黄色砂層を検出した。この層は 1 区での江戸時代後期に相当する砂層と考えられる。遺物は出土していない。この面では東側で青灰色シルト層が露出した。これは西側へ向かって地山が傾斜している。さらに確認のために掘削を行なった結果、西壁では中世期相当層と考えられる白砂層も検出した。しかし、No. 1 地区で検出した有機質土層は、この調査区では堆積が見られない。地山である青灰色シルト層の下は約 1m の青灰色砂層となった。

以上、No. 2 地区においても遺構は検出されず河川の砂堆積物が見られたに過ぎない。

III まとめ

以上で 2 カ所の調査を実施したがこの結果をまとめたい。

No. 1 地区では 5 層上面の最終堆積は江戸時代後期と推定される。このため江戸時代においては 4 層にあたる粘土を整地土として客土とすることにより、この谷間を耕地化したものと推定される。このことは調査地の東側にある上池の堤を築造することによる谷全体の開墾事業と関わることであろう。

出土遺物の状況はすべて摩滅の激しい破片であるところから、東側に立地していた集落からの流失品が堆積して土砂とともに包含したものと判断された。

発掘調査による結果は以上であるが、調査区が下池山古墳の前方部に隣接した前方部前端が破壊を受け前方部が当初どこまで伸びていたのか、また古墳の東側に現在でも見られる濠状の区画がこの調査で確認されるかが問題であるが、これらの点に関しては検討できる材料は確認されなかった。むしろ 2 地点において中世期以前には谷地形が復元されることが示されたわけで、このことは下池山古墳の前方部は、今回の調査地までは伸びていないことをうかがわせる結果である。

IV 下池山古墳の古様

下池山古墳の墳丘周辺の状況は、前方部東側には新池があり西側には広大な面積を有する下池がある。下池の西北隅には嘉永6年（1853）竣工の記念碑があり、現在見られるような池に拡張されたことが判明する。しかしそれ以前の状況は地籍図等では明かではない。

安政6年（1859）に描かれた成願寺町所有の絵図によると、下池山古墳が中央に描かれ、その左（西側）には「字下池古床」「古道」「堀添」と記されている。そして下池山古墳と古道の間には南北方向に直線が描かれこれを古道と称しているようである。古道と古墳の間は「下池古床」と称された幅の狭い池があったようである。つまりこの絵図は池が拡張される以前の状況もあわせて表示しているようである。古床は東側の「新池」に対応するような規模で描かれている。嘉永6年の池の拡張工事は、古道を廃止して古床を拡張することで完成されたのである。

このように成願寺町の絵図を検討すると、古墳を中心にして東、西、北側にコの字形の区画が推定されるのである。南側は中筋川がちょうど前方部前端をかすめるように流れているが、この池拡張工事の時期に前端部が破壊されたことも推測される。

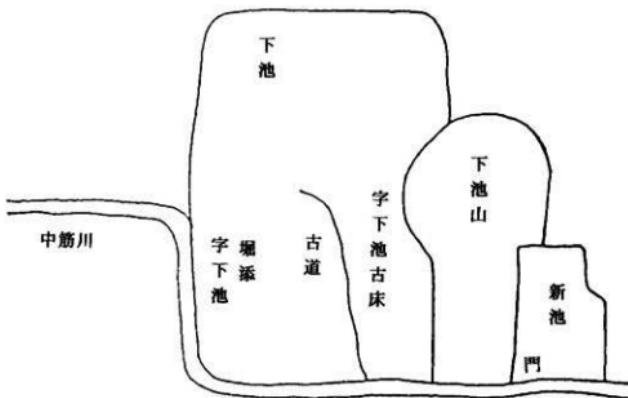


図33 安政6年成願寺下池の拡張略図（『改訂天理市史下巻』217頁から）

付篇 中山町遺物散布地における花粉分析

金原正明（奈良教育大学）

金原正子（古環境研究所）

1. 試 料

試料は天理市教育委員会が調査を行ない採取した6層（No.1地区）の堆積物の計2点である。6層は褐色を呈しシルトを主に構成される有機質土であり、最下層は灰色を呈する中粒砂を主とする砂である。

2. 方 法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行なった。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈殿法を用いて砂粒の除去を行なう。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎を施す）。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行なう。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行ない、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理化学的各処理間の水洗は、1500 rpm、2分間の遠心分離を行なった後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行なった。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行なった。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行なった。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類し、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

3. 結 果

6層は花粉粒が多く検出されたが、最下層はほとんど検出されなかった。出現した分類群は、樹木花粉21、樹木花粉と草本花粉を含むもの4、草本花粉16、シダ植物胞子2形態の計43である。これらの学名と和名および粒数を表に示す。主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を示す。

[樹木花粉]

モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、カバノキ科、クマシデ属-アサダ、クリーシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、アカメガシワ、サンショウ属、カエデ属、ブドウ属、グ

ミ属、モクセイ科、リョウブ、ニワトコ属—ガマズミ属

[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科—イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科

[草本花粉]

オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ
節、アカザ科—ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、セリ科、オオバコ属、タンボ
ボア科、キクア科、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

单条溝胞子、三条溝胞子

1) 6層

樹木花粉の占める割合が草本花粉よりやや高い。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亞属が最も優
占し、スギとイチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科の出現率も高い。樹木花粉では他にクリーシイ属、
コナラ属コナラ亞属、エノキ属—ムクノキ、サンショウウ属などの広葉樹とツガ属、マツ属複維管
束亞属が出現する。草本花粉ではイネ科が優占し、ヨモギ属、カヤツリグサ科、タデ科、イネ属
型の出現率もやや高い。他にオモダカ属、ミズアオイ属なども出現する。なお、花粉分析過程
で回虫、鞭虫の寄生虫卵が少量検出された。

2) 最下層

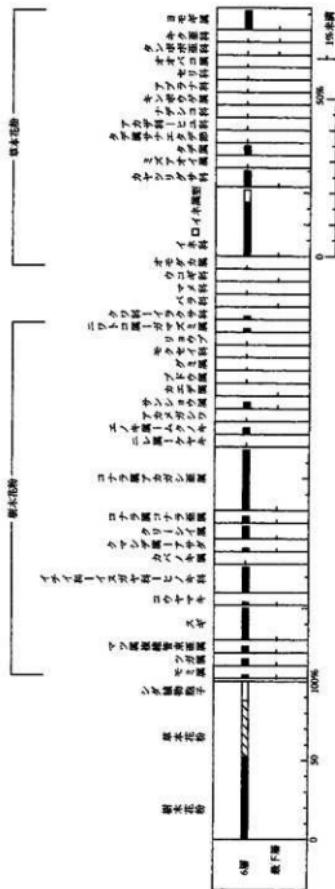
検出された花粉粒は少ないが、樹木花粉ではコナラ属アカガシ亞属、スギ、サンショウウ属、マ
ツ属複維管束亞属、草本花粉ではイネ科、タンボボア科、ヨモギ属が他より多い。

4. 考 察

6層の時期は、樹木花粉の占める割合がやや草本花粉より高いため、堆積地周辺は草本が分布
し、比較的隣接して森林が分布していたと考えられる。堆積地および周囲はイネ科が多く、人為性
の高い環境が示されている。イネ属型花粉と水田雑草であるオモダカ属とミズアオイ属の出現
から、周囲で水田が営まれていたことが推定される。ヨモギ属やタデ属はやや乾燥したところに
生育し、やや乾燥した人為改変地の分布が示唆される。周囲は乾燥地と水田などの湿地環境が分
布し、地形の高低が入り組んでいたことが反映されている。森林が比較的近接して分布していた
とみられ、カシ類（コナラ属アカガシ亞属）を主にスギやヒノキの針葉樹などの混じる照葉樹林
が分布していたと考えられる。なお、寄生虫卵の検出から比較的近い地点に人が生活していた可
能性が示唆される。最下層は花粉粒が少なく復元しにくいが、水田を除いた6層と類似の埴生
と環境の分布が推定される。

(参考文献)

- 中村純 (1973) 花粉分析. 古今書院、p. 82-110
- 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復元. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法. 角川書店、p. 248-262
- 島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科學博物館収蔵目録第5集、60p
- 中村純 (1980) 日本産花粉の標識. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p
- 中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*oryza sativa*)を中心として. 第四紀研究、13、p. 187-193.
- 中村純 (1977) 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学、第10号、p. 21-30



中山町遺物散布地における花粉ダイヤグラム（花粉総数が基準）

表1 中山町遺物散布地における花粉分析結果

学名	分類群(Taxa) 和名	試料	
		6層	最下層
Arboreal pollen	樹木花粉		
<i>Abies</i>	モミ属	4	2
<i>Tsuga</i>	ツガ属	6	2
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複維管束亞属	8	5
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	40	9
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ	5	1
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	33	
<i>Betula</i>	カバノキ属	2	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ	4	1
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>	クリシイ属	17	3
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	9	1
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	77	9
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	1	
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ	7	
<i>Mallotus japonicus</i>	アカメガシワ	1	
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属	8	7
<i>Acer</i>	カエデ属		1
<i>Vitis</i>	ブドウ属	1	
<i>Elaeagnus</i>	グミ属	2	
Oleaceae	モクセイ科	1	
<i>Clethra barbinervis</i>	リョウブ	3	
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属	4	
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉		
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	5	
Rosaceae	バラ科		1
Leguminosae	マメ科	1	
Araliaceae	ウコギ科		1
Nonarboreal pollen	草本花粉		
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	1	
Gramineae	イネ科	68	14
<i>Oryza type</i>	イネ属型	17	1
Cyperaceae	カヤツリグサ科	20	1
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属	1	
<i>Polygonum sect.</i>	タデ属	11	
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	3	
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属	3	
Cruciferae	アブラナ科	2	
Umbelliferae	セリ科	1	
<i>Plantago</i>	オオバコ属	1	
Lactucoideae	タンボボ亜科	2	12
Asteroideae	キクアヤ科	1	3
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	24	12
Fern spore	シダ植物胞子		
Monolete type spore	単条溝胞子	41	29
Trilete type spore	三条溝胞子	14	2
Arboreal pollen	樹木花粉	233	41
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	6	2
Nonarboreal pollen	草本花粉	157	43
Total pollen	花粉總數	396	86
Unknown pollen	未同定花粉	4	2
Fern spore	シダ植物胞子	55	31
Helminth eggs	寄生虫卵		
<i>Ascaris</i>	回虫卵	1	
<i>Trichurus</i>	鞭虫卵	3	

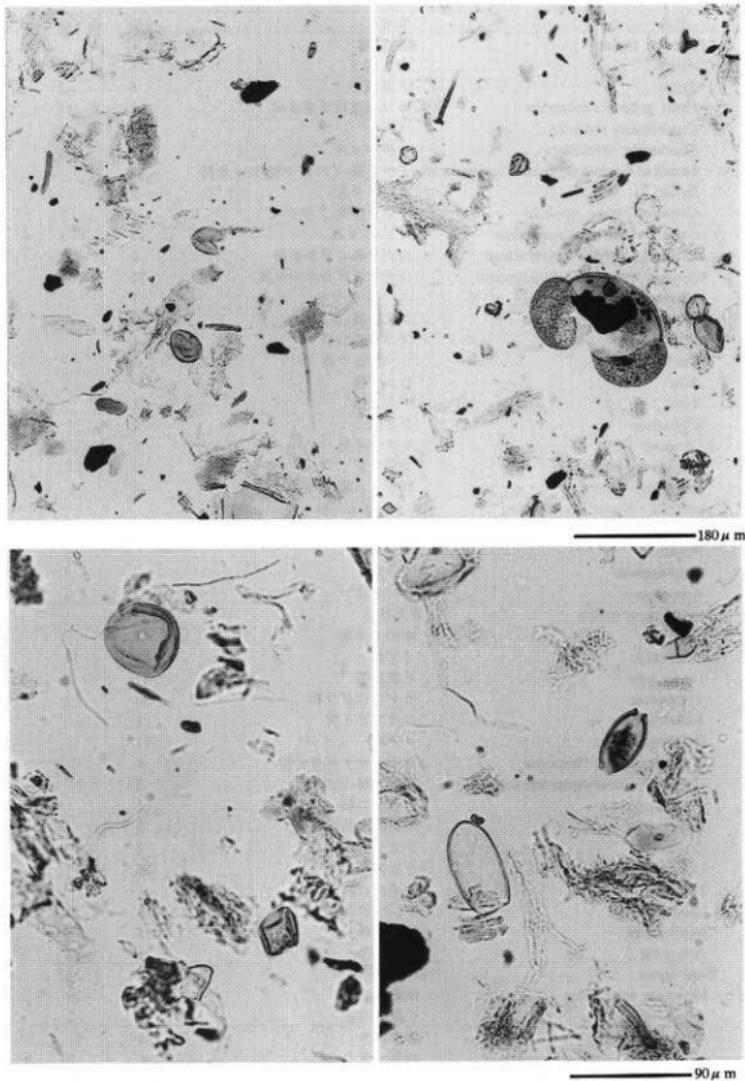


図34 下池山古墳隣接地の花粉分析顕微鏡写真

平成 9 年度

(1997)

1. 波多子塚古墳 - 莱生町

I はじめに

波多子塚古墳は、奈良盆地東部の山麓沿いに展開する大和古墳群に属する前方後方墳である。大和古墳群は、総数約22基の大型前方後円墳・前方後方墳・円墳で構成される初期の前期古墳群であり、その立地条件により同一尾根筋上に立地する中山支群と山麓沿いの扇状地形上に立地する莱生支群に大別される。当古墳は、後者の萊生支群に属し、東西方向に主軸をもつ古墳である。同支群中には大型内行花文鏡の出土で知られる下池山古墳や近接地の調査により周濠の外形が明らかになったノムギ古墳、さらに西に位置するフサギ塚古墳、星塚古墳の5基の前方後方墳の存在が知らされているが、墳丘裾における確認調査の実施例は無く、墳丘上の調査例は下池山古墳のみに留まっているのが現状であった。

当古墳は、細長く低い尾根筋を利用して築かれており全長約140m、後方部東西幅50m、南北約45m、前方部幅約14m、長さ約90mをそれぞれ測る。細く長い特異な形態の前方部が特徴であり、前方部と後方部の間の比高差が大きいのも特色と言える。墳丘上は全面的に果実園として開墾され、築造時の形状が大幅に改変されているものと考えられ、前方部が異常に長いという特徴も築造当初のものである確証は無く疑問視される点もある。現状での後方部墳丘上は葺石石材を転用した石垣により段状に改変されている。墳丘上段の墳頂部外縁の石垣には板状の石材が多く使用されているため埋葬主体部は堅穴式石室と想定され、外表施設としては現状の石垣に転

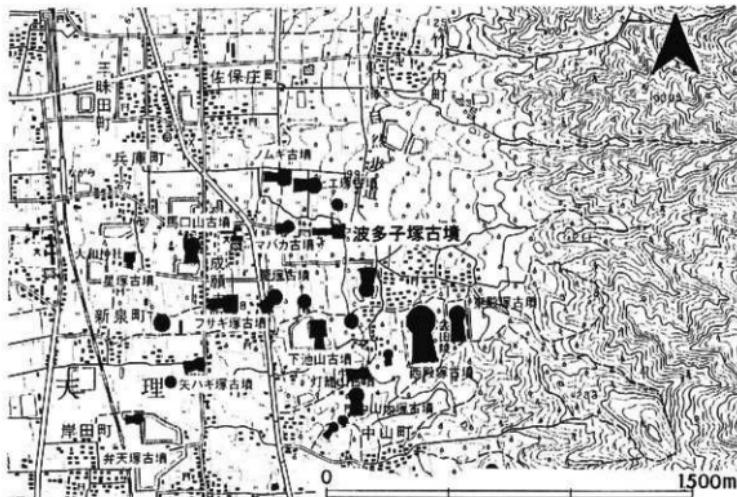


図35 大和古墳群と波多子塚古墳の位置図 (S=1/20,000)

用されている葺石石材の存在から葺石をもつものと考えられる。また埴輪類の存在が過去の遺物採集により確認されている。

今回の調査は、大和・柳本古墳群の保存と活用のための基礎資料を得る目的で実施した範囲確認調査であり、後方部北側の墳丘斜面から裾部にかけての位置で実施した調査である。現地における調査は平成10年2月1日より開始し、同年5月8日にすべての作業を終了した。総調査面積は約120m²であった。

II 調査の概要

1. 調査の方法

今回の調査では後方部中央北側の墳丘斜面上から裾部にかけて古墳の主軸に直交させた幅4mを基調とする調査区を設定し、墳丘の遺存状況、裾部における基底石列および周濠の有無確認、築造時期を推定可能な埴輪や土器類の採集等に主眼を置きながら発掘調査を進行した。

2. 検出遺構

a. 葺石および基底石列

後方部の北側で、現状の地表面下約4mのレベルで周濠底面および墳丘裾基底となる葺石を検出した。墳丘裾の葺石は上面幅3m、高さ2m弱で遺存しており、西側では石材の剥落が目立ち裏込めの小礫の露出が顕著であったのに対し、東側では残りが良く大きめの石材が積まれていた。基底石は垂直に面を揃えて直線的に並べられ、その上部に約40度の傾斜角に角度を揃えた石材を積み上げていた。基底石の背面では同程度の大きさの石材を水平に敷き詰め葺石の基礎固めのための控え積みを丁寧に作り上げていることが窺えた。また、葺石の上部では墳丘裾の地山を削り出した傾斜面に砂質土を置いた後に石を葺いていったことがわかる。

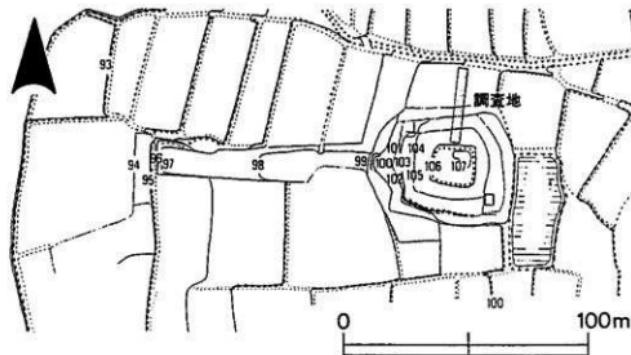


図36 調査地点位置図 (S=1/2,000)

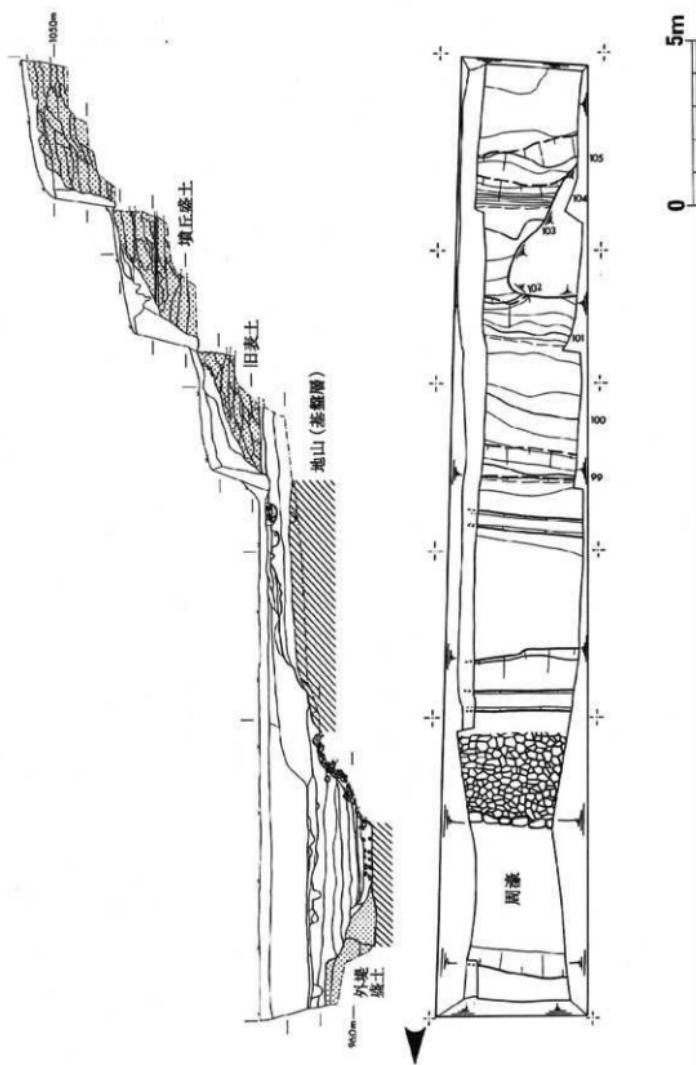


図37 調査区平面・土層図 ($S=1/150$)

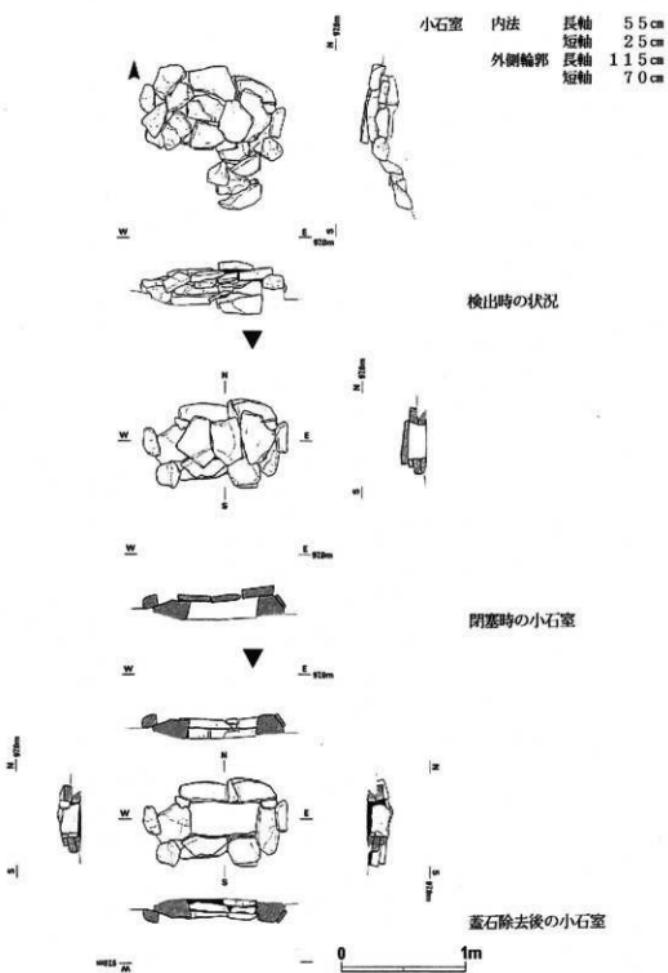


図38 外堤上部の小石室 ($S=1/40$)

b. 周濠

周濠は、上面幅約7m、濠底面幅約4mを測る。埋土は底面から約2mの基盤層上面までが築造直後から埋没するまでの堆積土であるが、最上面では平安～江戸期までの水田面となっていたと考えられる。周濠埋土で最も古い堆積は北側の粘土ブロック混じり砂質土であり、外堤側から崩落した土壤のブロック堆積と考えられるものである。埴輪片を含み、築造後に間もなく堆積したと思われる。その後は安定した堆積状況から崩れた葺石や埴輪類、土器類を包含する濠底の堆積土が形成されるが、一時的な状況でありこれ以後の堆積土は水流による砂、シルトの互層堆積の繰り返しによって形成されている。

c. 外堤上部の小石室

周濠を挟んで北側のトレンチ北端では現存高約1.5mで外堤となる高まりを検出している。この外堤の上部では東西に主軸をもつ板石積みの小石室が構築され、蓋石を載せたあとに板石による閉塞がなされた未盗掘の状態で確認することができた。内部より遺物の出土は無く人骨等の遺存も認められなかつたが、小児あるいは成人の改葬、再葬の用途で作られた石室と考えられる。時期については石室閉塞後に覆土として積まれた砂質土層の上面が現存する外堤上部の盛土として認められる状況から、古墳築造途中あるいは築造時に外堤に付随させて構築されたものと理解しておきたい。

d. 墳丘構造

現状の墳丘裾となる石垣の前面(北側)約10mまでの緩斜面は基本的に地山整形であり、現状の墳丘は複数尾根に盛土を積み上げ肉付けされた盛土整形によることも墳丘の断ち割りによる土層観察から推定できる、地山面と盛土面との間には旧表土層を介在し、その下面の地山面においては弥生後期末～布留式初頭の土器片が出土する小穴、落ち込み等の遺構が検出されている。また、墳丘盛土からも布留式土器の小片が出土している。

III 出土遺物

今回の調査では墳丘斜面、周濠埋土、周濠上部の近世盛土より多くの埴輪片が出土しているが、原位置を保つものは墳丘が近世の改変により著しく削平されていたために認めることができなかつた。そのため、出土した埴輪片はいずれも部分的な特徴のみが窺える程度のもので占められている。土器類についても同様に古墳に伴うものと判断できるものは極めて少なかつた。以下、各遺物の特徴のみ記す。

1. 墓輪類

破片資料からみた組成では、朝顔形埴輪、鱗付き円筒埴輪、楕円筒埴輪に有段口縁や鋸歯文の線刻がみられる特殊器台形埴輪等がある。透し孔の形状では三角形、巴形が主体となる。基本的に外面を赤彩し、内面をヘラ削りする特殊器台の製作手法を踏襲するものが多く、これに加えて鱗の付加や朝顔形といったより定形化した埴輪に近い要素が認められることが特徴的である。

2. 土器類

周濠上部の近世盛土より外面赤彩の高杯脚部が出土しており、墳丘上からの搅乱土に混在した

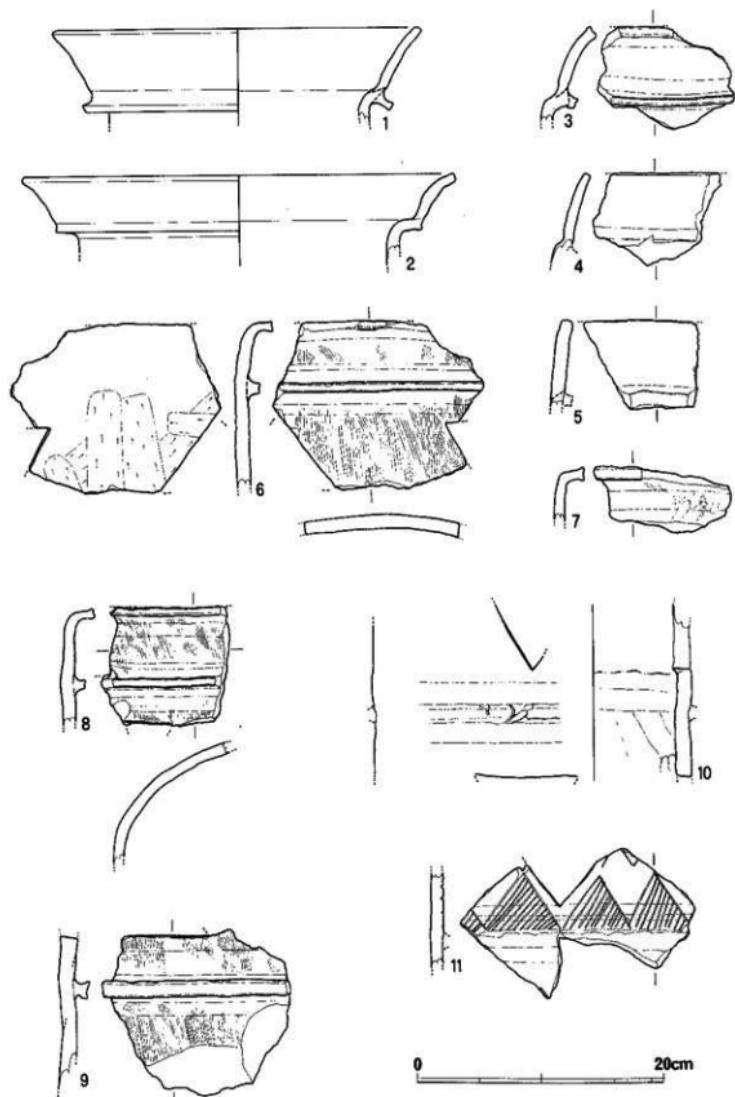
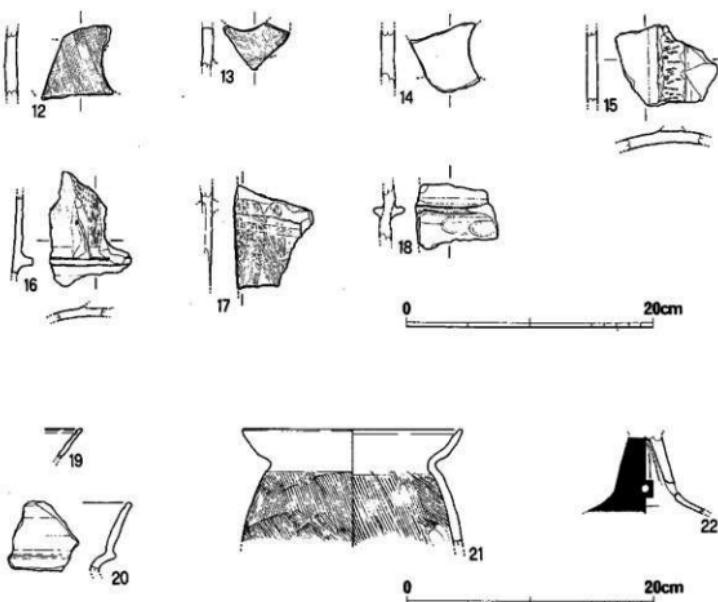


図39 出土遺物実測図 ($S=1/4$)

図40 出土遺物実測図 ($S = 1/4$)

ものと思われる。ほかにも布留式土器の甕の口縁部が墳丘盛土より出土しており、ともに布留式古相の帰属時期で据えられる資料である。また、周濠埋土からも布留式古相から新相の土器片、須恵器片、中世前期の土器片等が出土しており、周濠埋没時の各堆積層ごとの時期幅を知る手掛かりとすることができる。

IV まとめ

今回の調査により新たに確認することができた事柄は以下の3点である。

1. 墳丘規模

現状の墳丘裾が実際には墳丘の上段部分に該当することが下段墳丘裾の葺石、基底石列の存在確認により明らかとなり、従来の後方部南北幅が北側に10mほど延びて墳丘主軸から線対称に展開した場合の後方部幅は約65mとなった。このことからこれまでに波多子塚古墳の特徴とされた

細く長い前方部に代表される特異な墳丘形態についても考え直す必要が生じた。

2. 外堤上部の小石室

墳丘上部の石垣に見られるものと同じ芝山産玄武岩の板石石材を使用して作られた小石室を外堤上部で確認している。こうした小石室はもちろん、主要な埋葬主体部に近在するかたちで別の埋葬主体部が造られた例は大和古墳群では初の発見例であり、考えられる帰属時期が築造途中ないしは築造時期と同時期であることや検出位置との関係からも従属性の埋葬と想定されるものである。

3. 墓輪類の様相と築造時期

出土した墓輪類からは、以前の墳丘上採集品より考えられていた波多子塚古墳の墓輪類の組成がさらに詳細に検討可能となり、前記のような組成から大和古墳群における当古墳の時間的位置付けを限定し得る有効な材料が得られた。前年度に実施した東殿塚古墳の土器類を伴った墓輪類の組成と比較した場合に、波多子塚古墳では若干の新しい様相が見られることから築造時期についてはわずかな時期差をもって後出する古墳であるとも考えられよう。東殿塚古墳の時期については墓輪配列の供獻土器から4世紀初め頃と考えおり、当古墳で墳丘盛土より布留式古相の土器片が出土することも含めて概ね4世紀前葉の範疇に築造時期を考えておきたい。

2. 櫛山古墳（第5次調査）－柳本町

I 調査の契機

1. 櫛山古墳について

奈良盆地の東南部、龍王山・纏向山山麓に所在する柳本古墳群は、行灯山古墳（崇神陵古墳）や渋谷向山古墳（景行陵古墳）を中心に、古墳時代前期の大形前方後円墳が展開する。櫛山古墳は龍王山麓から延びる丘陵尾根筋を切断して築いた古墳で、崇神陵古墳の東側に立地した全長160mの大形古墳である。墳形は、いわゆる双方中円形と呼ばれ、埋葬施設を築いた円形プランの主墳丘と、その東西両側に前方部を築いた特徴的な墳形をもつ古墳である。中円部墳頂で標高131.88m、東前方部先端部で標高121.50m、西前方部先端部で標高113.5mあり、現状は3段築成の墳丘に見える。

昭和23年に実施した調査（第1次調査）では、中円部墳頂からの豊穴式石室が見つかり、内部から石棺の一部が出土している。残念ながら盗掘を受けその残骸として多数の石製腕輪類と鉄製品が出土している。また、昭和24年には東前方部の調査が行われ、頂上の平坦面から白磚を敷いた特殊遺構が見つかっている。すでに第1・2次調査から半世紀を経過しているが、その間、昭和33年に史跡指定古墳となって現在に至っている。その後、昭和57年度には櫛山古墳の南方、泥池の南側で山の辺の道に伴う環境整備として休憩場所が設置され、その事前調査を奈良県立橿原考古学研究所が実施している。この調査では櫛山古墳に関わる遺構は出土していない。また、昭和63年度には西前方部の北面に隣接して山の辺の道周辺の環境整備として公園が設置された。その事前調査（第3次調査）が奈良県立橿原考古学研究所によって櫛山古墳の様子を知る貴重な調査が行われ、前方部北面の墳丘裾を区画する掘り割りと外堤状の遺構が検出され、掘り割りから口縁部を鋸歯線に成形した梢円筒埴輪がまとまって出土している。天理市教育委員会では、平成5年度に櫛山古墳の平板測量作業（第4次調査）を行い、大和・柳本古墳群の資料収集として墳丘形態の測量調査を実施している（測量図については改めて報告する）。

2. 平成9年度調査の契機

天理市柳本町字櫛山1867番地に所在する櫛山古墳は、その周囲にため池があり前方部南西隅の渡堤から山の辺の道を通じて古墳内へ入ることができる。この渡堤は、櫛山古墳の南側にある泥池と北側にある地蔵池とを区画し、泥池の方がおよそ3mほど水面が高い。水利上の水分から泥池と地蔵池との間に築堤を築いたものだが、この築堤を構築する際に櫛山古墳の墳丘を取り込んだものである。そのため櫛山古墳の史跡指定においては、古墳の周辺を取り巻くため池と渡堤を含めて史跡指定がなされている。ところで櫛山古墳の渡堤は、かねてより泥池の溜め水が地蔵池側へ漏水していることが地元水利組合（柳本町）から指摘されていた。本市教育委員会としては、その度に応急処理として漏水箇所に土のう積みをおこないながら築堤に及ぼす影響を避けたが、水面に沿って侵食が1mにも達する現状において、築堤の老朽化が避け切れない状況であった。おりしも、平成7年に発生した阪神大震災では天理市で震度4を記録し、再び地元水利組合から漏水の報告がもたらされた。従って、地元水利組合の要請に従って天理市農林課が史

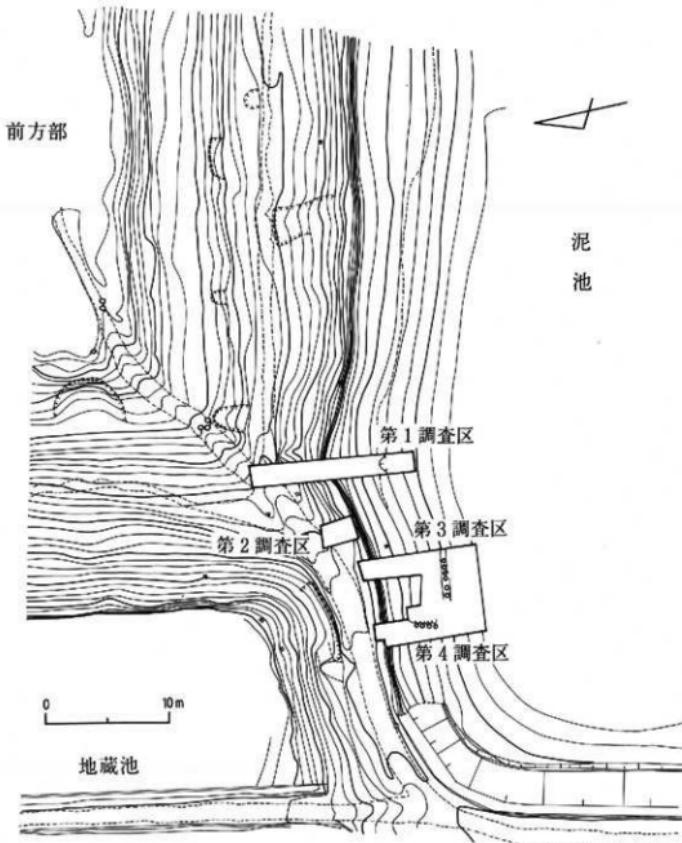


図41 第5次調査区位置図 ($S=1/400$)

跡の現状変更の申請を行い、天理市教育委員会・文化財係が同市農林課に改修工事の指導と樹山古墳に影響を及ぼさない改修方法の検討を求め、奈良県文化財保存課との協議から事前の文化財調査（第5次調査）を実施したものである。

なお、発掘調査は天理市教育委員会・文化財係の松本洋明が担当し、平成10年1月6日～3月19日まで実施した。

II 調査の概要

渡堤の護岸改修工事は、泥池の護岸を区画しているコンクリート仕立と連接するため、渡堤から墳丘までコンクリートを敷いた護岸施設を設置することになった。なお、堤の盛り土にあたる鋼土を整備し直した場合、前方部前面の墳丘を損傷する可能性がったため、堤の盛り土は現状のままでし、ため池の護岸の補強を計るものとしてコンクリート壁を設置する計画となった。なお、改修作業ではコンクリート壁の基礎工事によって古墳を損傷する可能性があったため、改修方法の指導を前提に調査区を設定し、基礎工事が遭構に影響を及ぼさないよう指導を行った。なお、調査区の設定は第1～4調査区と拡張区を含め63m²に及んだ。

1. 第1調査区

コンクリート壁が樹山古墳の墳丘に取り付く、西前方部南西コーナ付近の前方部側面に設定した調査区である。現状に見る墳丘の1段目から墳丘裾に向かって設定した幅2m、長さ14mの調査区である。

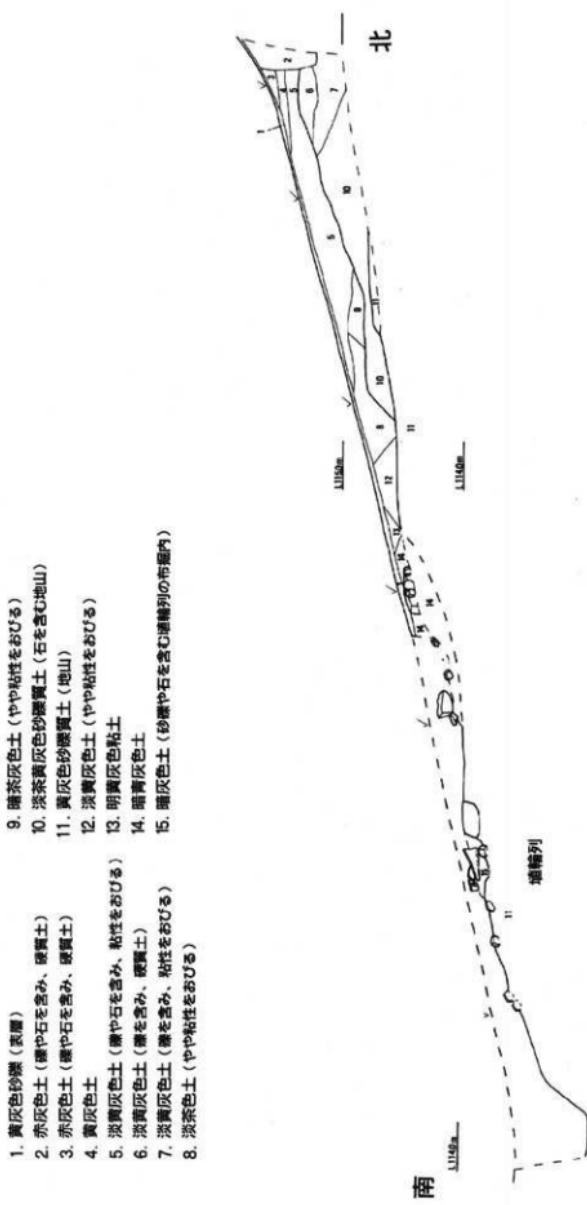
前方部側面の墳丘斜面では、その上半部から葺石が出土した。出土状態は、現状の表土面からおよそ40～50cm掘り下げて露出し、前方部1段目の斜面を構成する墳丘の構築面を検出したものである。しかし、斜面下半は葺石が流失し、墳丘の原形を留めていない。

ところで、墳丘の裾部は葺石が流失し地山が露出していた。これは、泥池の水面にあたる墳丘の裾が約1mの奥行きまで侵食を受けていたため、既に地山地層が肉眼で確認できる。また、古墳を築造した当時は、空堀であった墳丘の南側が後世の水利灌溉によってため池に改変されたものである。泥池を造成する際に古墳の裾回りを掘削したため墳丘裾の基底部葺石が取り除かれてしまったものと思われる。改修工事に伴うコンクリート壁の取り付けは、侵食部分まで含めて行った。

2. 第2調査区

渡堤と墳丘部分の様子を確認するために設定した調査区である。幅1m、長さ2mにわたって掘り下げ、築堤を築いた盛り土と墳丘部分に伴う土層を見分けるために予定した調査区である。

なお、第3・4調査区において渡堤の状況が判断できたため、第2調査区の掘り下げを中断している。



1. 黄灰色砂礫（夷面）
2. 赤灰色土（礫や石を含み、保質土）
3. 赤灰色土（礫や石を含み、保質土）
4. 黄灰色土
5. 淡黄灰色土（礫や石を含み、粘性をおびる）
6. 淡黄灰色土（礫を含み、保質土）
7. 淡黄灰色土（礫を含み、粘性をおびる）
8. 淡茶色土（やや粘性をおびる）
9. 淡茶灰色土（やや粘性をおびる）
10. 淡茶青灰色砂礫質土（石を含む地山）
11. 淡灰色砂礫質土（地山）
12. 淡黄灰色土（やや粘性をおびる）
13. 明黄灰色粘土
14. 晴青灰色土
15. 晴灰色土（砂礫や石を含む連続列の帯部分）

図 42 第3調査区西壁土層断面図 ($S = 1/40$)

3. 第3調査区

前方部先端の位置関係から設定した調査区で、幅2m、長さ9mにわたって埴輪回りに設定した。調査では、櫛山古墳とともに埴輪列を検出した。そのため、埴輪列の様子を確認するため、第4調査区との間を拡張して埴輪回りの検出に努めた。

埴輪列は、渡堤からおよそ6mほど内よりの泥池内から出土した。東西方向に樹立した円筒埴輪列底部3本と底部を並べ据えた布堀遺構を検出した。このため前方部の南面を区画する埴丘基底部が、現状よりもさらに泥池内部に幅広く展開していることが予測された。断面土層の観察では、泥池の砂岸から極わずかの深さで地山面を検出し円筒埴輪底部が残存し、埴輪列から南側1.5mの所では、ため池底面に向かって深く落ち込んでいた。埴輪列を検出したことから、埴丘にはもう一段埴丘斜面が存在していたものと思われる。埴輪列は、1段目と2段目との間にあるテラス面に並んでいたものであろう。一方、埴丘側には、緩やかに傾斜をもつ地山面(図42-11層)を検出している。その直上には硬く締まった淡黄灰色土壤(図42-6・7・10層)があり、古墳に伴う盛り土の痕跡と思われる。また、渡堤を築いた際に施す鋼土(図42-2層)の痕跡も検出した。堤の内部には、50cm程の深さをもつ布堀の痕跡があり、堤の基盤となる鋼土を構築する際に掘り込んだ布堀の跡である。ところで、布堀の基盤層(図42-3~5層)は、土質が軟質で2次堆積層と思われる。おそらく、鋼土を伴う渡堤は古墳時代に築かれたものではなく、泥池の水利事業にともなって築かれたものと考える。なお、埴輪列を検出した地点から埴丘側1~2mの範囲では石材が出土し、同地点付近に埴丘斜面を構築する葺石遺構が所在していたものと推測する。

4. 第4調査区

前方部先端を意識して設定した調査区である。幅2m、長さ9mにわたって築堤と埴丘との関係を探るために調査したが、埴輪列を検出したため調査途中で第3調査区との間を拡張し、前方部南西角の遺構確認を実施した。

第4調査区では、渡堤を築造する際の盛り土と、櫛山古墳の前方部前面を区画する埴輪列を検出した。埴輪列は、第3調査区とは配列方向が異なり南北方向に並ぶ円筒埴輪4本(図44-51~54)で、渡堤に向かってさらに埴輪列が続くものと思われる。出土した破片には、朝顔形埴輪の破片を伴い埴輪列が円筒埴輪と朝顔形埴輪を併用していたことが伺える。また、埴輪列と並行して埴丘側に人頭大の石材を用いた基底石が並び、前方部前面には段築成を伴う築造形態があり、そのテラス面に葺石と埴輪列を区画していたものである。土層観察では、泥池に伴う砂岸堆積(図43-1~9層)、渡堤に伴う盛り土(図43-13~18・20層)、古墳が築造された後に埴丘斜面に自然堆積した覆土(図43-36a~37d層)、葺石の下部、古墳の築造に伴う盛り土(図43-41・42a・42b層)、地山(図43-43層)に区別できる。なお、調査では前方部南西角が搅乱を受けており埴輪列を含め原形を留めていなかった。断面図では前方部の角にあたる部分で搅乱による二次堆積(図43-27~34a層)が認められ、現在の泥池が形成する以前に前方部南西角が崩れていったことが分かる。また、搅乱後もさらに二次堆積が続き(図43-21~24層)、その後に渡堤が築かれたものである。渡堤の築造後は、ため池の水面の上昇に従って砂岸形成が始まり現在のよう

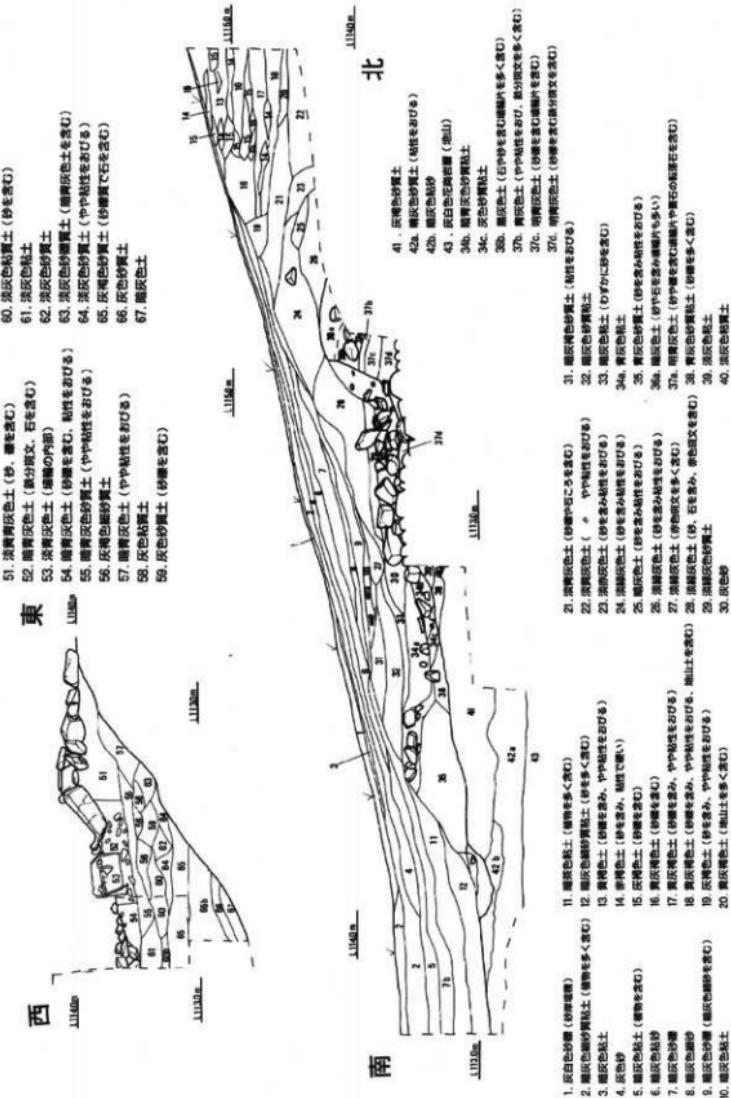


図 43 第4調査区西壁土層断片図 (S=1/40)

な景観が生まれたと推測する。

埴輪列は、前方部前面の埴輪列4本、前方部南側面の埴輪列6本、同じく抜け落ち2本を検出した。しかし、前方部南西角は、搅乱を受け落ち込んでおり、コーナ部分の埴輪列が残っていないかった。前方部前面の埴輪列には葺石を伴い埴輪列よりさらに下方に向かって葺石が広がっている。一方、前方部側面の埴輪列は搅乱が激しく、円筒埴輪底部が辛うじて残存する状態で、一部は流失していた。径30~40cmの円筒埴輪底部が、埴輪の中心からおよそ50cm間隔で透き間なく並んでいた様子である。底部の厚みや径には違いがある。

葺石は、検出した埴輪列の付近からおびただしい石材が出土している。前方部前面では、埴輪列と並行して人頭大の基底部石材が残存し、葺石と埴輪列の区画状態がよく分かる。断面観察では、前方部前面の場合、地山形成(図43~43層)した斜面に盛り土で造成(図43~51~67層)を行い、埴輪列を伴う段築面は盛土で施されている。埴輪列と並行して基底石と葺石が出土している。葺石は、横一列に並べた基底石と小口積みで石材を重ねていた葺石からなり、比較的良好に残っている基底石に比べて葺石は搅乱を受け残りが良くない。基底石の背面に散在する石材は、葺石を構築する際に施された裏込め石と思われる。

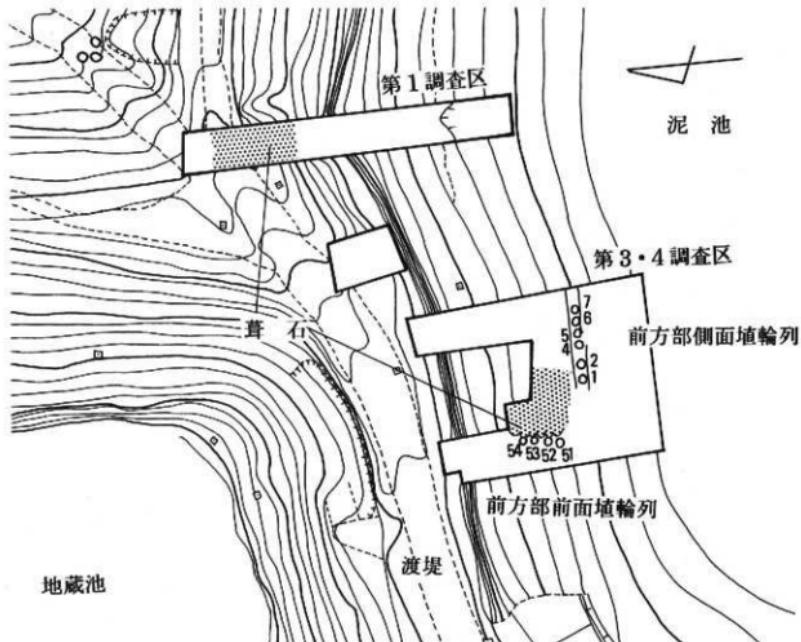


図44 前方部南西角の埴輪列ナンバー (S=1/200)



図 45 第3・4調査区平面図 ($S=1/40$)

前方部側面は、前述した通り攪乱を受けて埴輪列の残りは良くないが、調査では基底石が既になく、埴輪列の背後に散在する石材が葺石の残骸と思われる。

5. 西前方部南西角の墳形

第3・4調査区では、前方部の側面と前面の埴輪列を検出した。残念ながら前方部南西角付近が攪乱を受け、埴輪列も崩落していた。検出した埴輪列は泥池の砂岸から出土し、墳丘1段面の裾に並んでいたものである。調査では、前方部前面において埴輪列より下方へ続く葺石の様子が何えること、埴輪列を検出した段築面が盛り土で構築されていることなど、検出した埴輪列が墳丘の最下段を区画するものではなく、さらに下部の墳丘斜面1段が加わることが推測される。

III 出土した埴輪について

調査では、第3・4調査区から前方部側面の埴輪列（埴輪No1～7）と前方部前面の埴輪列（埴輪No51～54）を検出した。その内、No1～7とNo51の底部を持ち帰り実測した。また、遺構を検出するまでの覆土中からも埴輪破片が出土し、形態が分かるものについて僅かな資料に限るが実測図を作成した。

1. 墓輪列

埴輪列には、底部、及び底部からタガ1段目付近まで形態が残っていた。前方部前面の埴輪列の内、No53 墓輪底部から埴輪列に伴って朝顔形埴輪の頭部（図46-2）が出土し、埴輪列には朝顔形埴輪及び円筒埴輪を伴うことが推測される。また、前方部前面から検出した埴輪列4基の内、No52 墓輪底部は径45cmあり、径36.5cmのNo51 墓輪底部（図46-13）やNo53・54 墓輪底部と比較して大振りの底部が間隔をおいて並べられているようだ。

2. 形態

朝顔形の他に外反する口縁部直下にタガを施した円筒埴輪の口縁（図46-1）。円筒の胴部に鰐の剥離痕跡を留めるもの（図46-4・5）。鰐にタガの痕跡を留めるもの（図46-3）があり、鰐付き埴輪の存在が指摘できる。図に示したタガの痕跡をもつ鰐は第3・4調査区の覆土から出土したものだが、他に中円部付近からタガの痕跡をもつ鰐付き埴輪の部品を表採資料で得ている。胴部から鰐部分にかけてタガを貼り付ける埴輪が認められる。中円部墳頂から梢円筒埴輪列などが過去に報告されており、梢円筒埴輪や円筒埴輪などに鰐を含めてタガを施すもののが存在したようだ。出土した資料から纏年の特徴は、いわゆる2期の円筒埴輪であるが、円筒埴輪の底部には底部底面から1段目のタガ間まで16～18cmを計るものがあり（図46-8・13）、胴部のタガ間隔と同じタガ間隔を1段目の底部にもつものがある。なお、底部にスカシを施した形跡が今のところない。

3. 技法

埴輪列から出土した底部の内、底部底面から7～8cm上部の所で粘土の接合痕跡を留めたものがある（図46-8・10）。器面調整は、縦ハケが目立ち、外面の縦ハケ後、幅広く横ハケを加えたもの（図46-13）、内面の底部付近を局部的に横ハケを施したもの（図46-11・13）、縦ハケの後、押突技法を伴いタガを貼り付け、タガを成形した後に横ハケを施すもの（図46-13）、横長

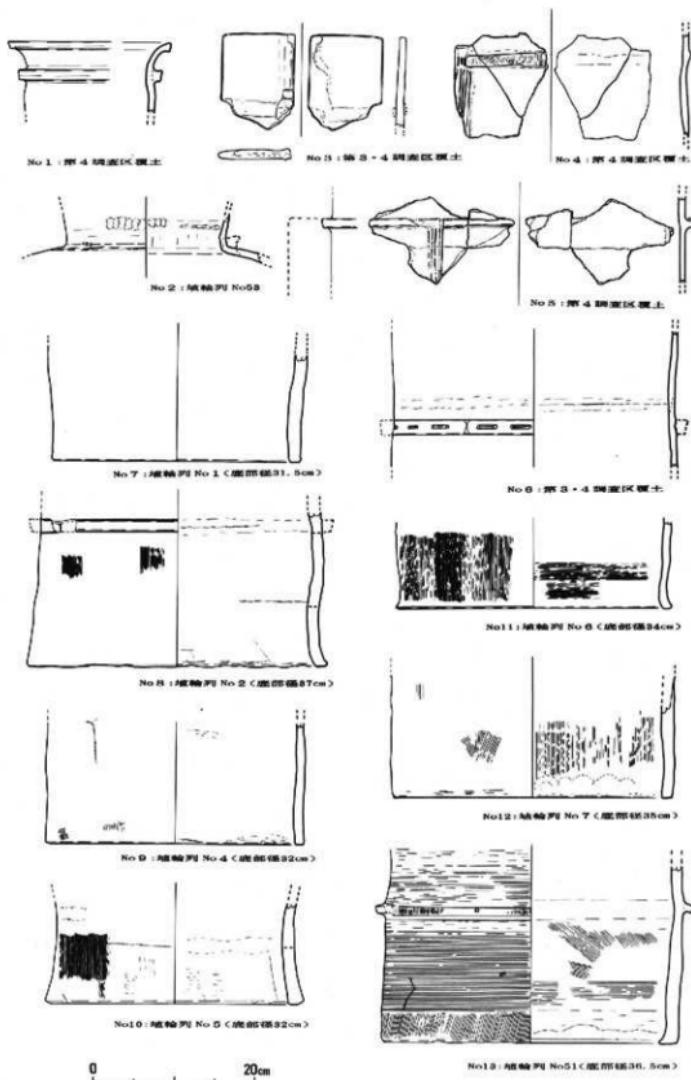


図46 墓輪実測図 ($S=1/6$)

の押突を施すもの（図46-6）がある。

4. 色調

調査区から出土した資料や櫛山古墳の表採資料は、埴輪の色彩に赤みが目立たず浅黄橙色やにぶい橙色又は褐色のものが目立つ。

IV まとめ

櫛山古墳の西前方部に渡堤の護岸改修するために、事前の文化財調査を行ったものである。調査では、西前方部に取り付いた渡堤の下部から前方部の基底部を築いた葺石と埴輪列を検出した。埴輪列は、西前方部側面まで残存していた。ただし、西前方部の南西角は、攪乱を受け隅角の原形を留めていなかった。埴輪列と葺石の出土した状況から現状の地形に見る墳丘裾よりもさらに6mほど外側で埴輪列を検出し、西前方部の先端付近の側面幅が現状よりも幅広くなる。また、泥池の岸辺から検出した墳丘基底部より、さらにもう一段下方に墳丘を構成する斜面が認められる。地形的には、西前方部側が低くなるため前方部前面にもう一段墳丘斜面を築いていた。地元の話では、泥池の岸辺から古墳に沿って並ぶ埴輪が、以前は砂岸に現れ肉眼でも見ることができたそうである。調査した様子から考えて、西前方部から中円部にかけて現状に見える墳丘裾（泥池砂岸）に埴輪列が存在し、さらに泥池底にもう一段墳丘斜面が想定できよう。

渡堤の北側、前方部前面から北面にかけてある地蔵池では現状に見る西前方部裾が2~3m低くなっている、調査で検出した下部の墳丘斜面が同様に深く落ち込んでいることも考えられる。また、第3次調査で報告された前方部北面の掘り割りとそれに伴う葺石は、現状の墳丘よりさらに一段下がった位置にある。泥池の底面に残る墳丘斜面と第3次調査で検出した掘り割りの落ち込み面とを対応させて墳丘形態を考えることもできよう。

なお、西前方部の前面にある渡堤は、古墳築造当時に構築されたものではなく、第3・4調査区の断面観察から築造後かなり時間を隔てた過程で、当時の古墳の表面にあった覆土上から鋼土や盛り土を加えて構築していたものである。渡堤の区画に伴って水面が上昇し現在のような景観が生まれた。

3. 柿本廃寺 - 楠本町

I はじめに

柿本廃寺は天理市楠本町所在の現在の和爾下神社境内地周辺に存在が考えられている寺院跡である。採集品の古瓦より奈良時代の創建が考えられているが、文献では平安期の延久2年(1070)の「興福寺雜役免帳」に寺名の記載が確認され、「東大寺要録」の記載からは東大寺の末寺であることが知られている。

これまでに奈良後期～平安期の瓦類や土器類の分布が知られるものの、寺域想定範囲における発掘調査例に乏しく実態の不明な点が多い遺跡であった。また、周辺には東側の丘陵上より西側の丘陵末端にかけて東大寺山古墳群を形成する東大寺山古墳、赤土山古墳、和爾下神社古墳、楠本墓山古墳等の古墳前期後半～中期の前方後円墳が所在し、当該期の集落等の重複も予測される地域であった。

今回の調査は駐車場建設に伴う事前調査として実施した確認調査である。現地調査は平成9年8月20日から22日の短期間で実施した。総調査面積は約60m²であった。



図47 柿本廃寺調査地点位置図 (S=1/10,000)

柿本廃寺

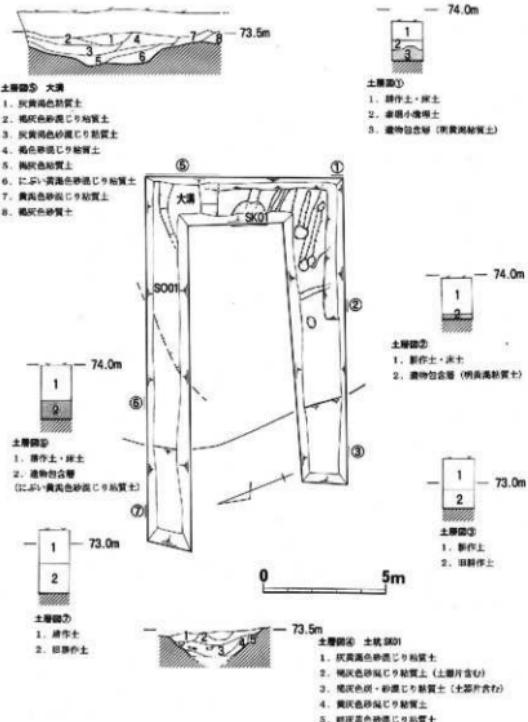


図48 調査区平面・土層図（平面図：S=1/200・土層図：S=1/80）

II 調査の概要

調査は駐車場予定地の外周に「コ」の字状に幅2mを貴重とした調査区を設定しておこなった。以下、その概要を記す。

1. 層序

調査地の現地表面では、東が標高74m前後で西端の73.4m付近へと西に向かい下降する地形が認められる。調査区における層序は図に示したように各地点ごとに異なる状況を呈していた。調査区東辺では、耕作土と床土の直下に土師器、須恵器、埴輪、瓦等の小片を包含する明黄褐～灰褐色粘質土の遺物包含層が遺存し、この上面では中近世以降の耕作に伴う素堀小溝群が検出されている。また、調査区東辺より西へ8m前後の幅の区間にのみ遺物包含層が残るが、北辺と南辺の東西方向の調査区の西端ではともに耕作土直下で地山となり、遺物包含層および遺構面はすでに耕作による削平を被り0.3～0.6mの段差が生じていた。従って、遺構面の残る部分が調査区の東半に限定される状況が把握された。なお、調査区の東西では地山の土壤も異なり、東側では

明黄褐色粘質土を基調とし西側に下降するに連れて黄褐～緑灰色砂質土へと移行する。

2. 検出遺構

調査区東半の遺物包含層上面で斜行する素堀小溝7条、南北方向の素堀小溝1条と時期不明の小穴5基を検出している。また、調査区北東隅付近で幅2m、深さ0.3mの大溝も検出しているが目立った遺物の出土は見られなかつた。確実に地山面で確認された遺構は調査区東辺中央の土坑SK01と先述の大溝の北岸に見られた地山粘土ブロック混じり褐色粘質土を埋土とする浅い落ち込みSO01のみであった。

落ち込みSO01には多量の埴輪片と微量の土師器、須恵器の小片を含み、南肩は大溝に切られるもののやや弧状を成して南側を囲むような平面形を呈していた。出土遺物より埋没古墳の周濠となるものと思われるが、規模については不明である。

土坑SK01は径1.5m強の規模の円形土坑になると思われる。調査区内では全形の半分のみを検出したに過ぎず、底面まで完掘していないが1m近くの深さまで掘削、遺物取り上げをおこなつた。埋土からはコンテナ2箱分の奈良後期～平安初頭の土師器、須恵器が出土している。柿本庵寺に関連した遺構と考えられるのはこの遺構のみである。

III 出土遺物

調査では総数コンテナ5箱の遺物が出土しており、そのほとんどは落ち込みSO01と土坑SK01出土の埴輪と土器である。ほかにも素堀小溝群や遺物包含層より土器片が出土しているが、いずれも細片であり量的にも少ない。従つて、ここでは主要な遺構出土遺物の概要のみ記すことにする。

1～8は落ち込みSO01出土の埴輪類である。1～4の円筒埴輪では一次調整のタテハケのち二次調整のヨコハケが廉状に施されるものが多く、断面台形の突帯が取り付けられている。また、2のように円孔の残るものも見られる。5～7の基底部では一次調整のタテハケのみで仕上げられるものがほとんどであり、小型小径の6のみヨコハケが残り趣が異なることから形象埴輪の一部と考えられる。ほかに8のような線刻と透かし孔が見られる蓋形埴輪の立ち飾りも出土している。これらの埴輪類では有黒斑で埴質のものの大半であり、概ね古墳中期、5世紀代初頭～前葉の帰属が考えられるものである。

9～22は土坑SK01出土の土器類である。土師器では外面を丁寧なミガキ調整する9の杯や内面に暗文ミガキの残る17の皿に古相の様相が見えるが、主体を成すのは外面を削る杯や碗である。須恵器では20のつまみの付された杯蓋が若干古く、その他では調整面での省略化が進むものが多い。全体的に奈良期末～平安期初頭を主体とするものの、平安期までの時期幅が認められる土器群である。

IV まとめ

今回の調査は工事立会の延長で実施した短期間で小面積の確認調査であったが、以下に列記するような事柄での新知見を得ることができた。

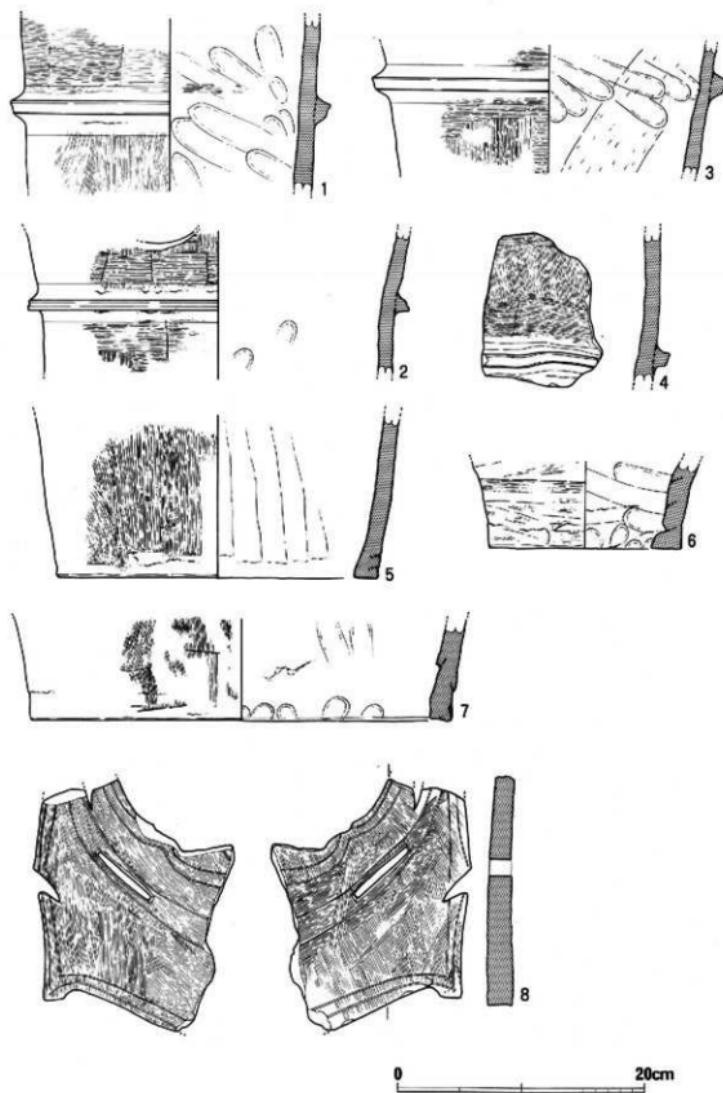


図49 出土遺物実測図 ($S=1/4$)

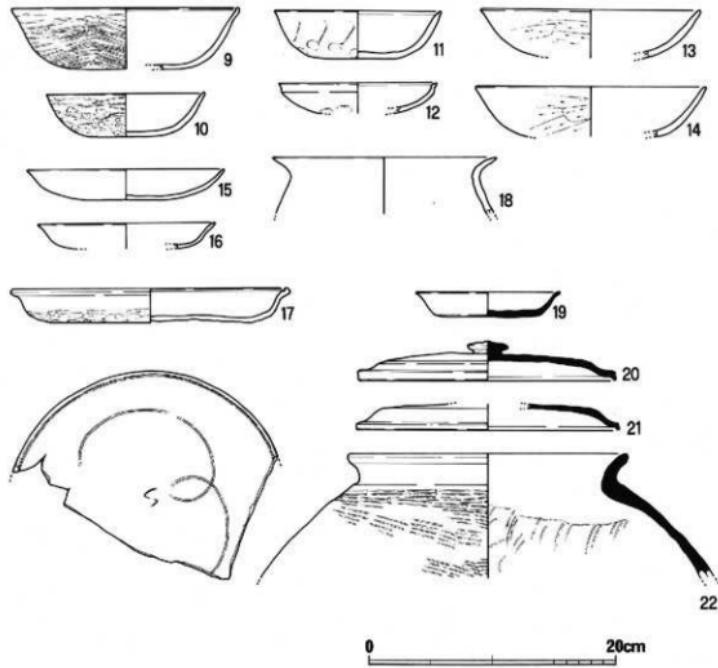


図50 出土遺物実測図2 (S=1/4)

まず古墳時代では埴輪類出土の弧状の落ち込み（周濠痕跡）の存在から調査地近辺にかつて古墳が存在したことが明らかとなった。古墳中期の埴輪類の内容からは大型古墳であったことが想定されるが、残念ながら規模等については不明な点が多い。現状では東の和爾下神社古墳と西側の櫟本墓山古墳に挟まれた当該地点付近での所在のみを強調できよう。

次に、柿本庵寺に関わる遺構では土坑1基のみであるが、時期的にも該当する遺構が確認できた点を評価したい。

以上の遺構は古墳から寺院への移行で破壊され、中近世の耕地化により現在の景観に近づいたものと理解できよう。いずれにせよ、埋没古墳の規模、寺域の確認、把握までには今後の周辺における調査の進展を待たねばならないであろう。

4. 龍王山城南城跡 - 田町

I はじめに

龍王山城跡は天理市田町龍王山 826 に所在するが南城の一部は桜井市域になっている。南城のいわゆる「本丸」から一段下がった平場において休憩所の設置計画が持ち上がった。これまで龍王山城の調査はといえば、村田修三氏の地表面観察による縄張図の作製があつたぐらいで発掘調査は皆無であった。³³ このため事業計画地の事前調査を行ない、この成果を受けて再度休憩所の設置の是非を協議することとした。結果的には以下に述べるように全面にわたって遺構が検出されたため、休憩所設置の計画は断念された。

調査は平成 9 年 3 月 10 日～同年 5 月 16 日に実施した。調査面積は約 480m²である。調査の成果としては礎石列、石組遺構、石段などがあり、出土遺物は丸瓦、鉄釘、土器片などである。

II 龍王山城跡について

龍王山城跡は大和盆地と東山中を画する山脈の高峰龍王山（南城の標高は 585.9m）に築かれている。南城と北城に別れて空闊地形が存在している。全体の規模は南北 1.2km、東西 600m ほどで、面積は約 720.000m²におよび、奈良盆地周辺に築かれた山城の中では最大規模を有している。

中世山城は戦国時代の 15 世紀後半になると奈良盆地の有力国人である、古市氏、筒井氏、豊田氏、箸尾氏、十市氏、越智氏などによる戦いが激しくなり盆地周辺に多数の山城が築城された。戦国時代末期、織田信長の上洛（1568 年）と足利幕府の滅亡（1573 年）を経てようやく戦乱に終止符が打たれて山城も取り壊されたのである。



図 51 龍王山城跡の位置

龍王山城跡の築城時期ははっきりしない点が多く、15世紀後半ごろには十市氏により築城されたようであり、文明15年には山城についての記事が確認される。そして天文11年には十市遠忠が柳本一帯を所領したことにより山城も完成されたのであろう。

永禄2年には三好長慶より大和一国への支配を許された松永久秀は信貴山城に入り、3年には龍王山城も松永の支配するところとなった。松永久秀は天正元年ごろまでには奈良盆地の北の多門山城、東の龍王山城、西の信貴山城という三城体制による一国支配を完成させたと推定される。

しかし、天正5年には織田信長軍との戦に敗れて信貴山城で自害し、翌年龍王山城も破却され奈良盆地の戦国時代も終焉を迎えた。

第1期 15世紀後半十市氏により龍王山に山城が築かれる。

第2期 永禄3年には松永久秀が支配する山城となり、以後天正6年の破却まで18年間存続したのである。

III 調査の概要

南城跡は④（以下村田修三氏の調査番号による）の最高部の平坦地を中心にして、北側では①②、③の平坦地と、南側へは⑤、⑥の平坦地が南北方向の主尾根上を利用して築かれている。この主尾根から盆地部に伸びた西側尾根や斜面にも平坦地や堅堀が数多く築かれている。

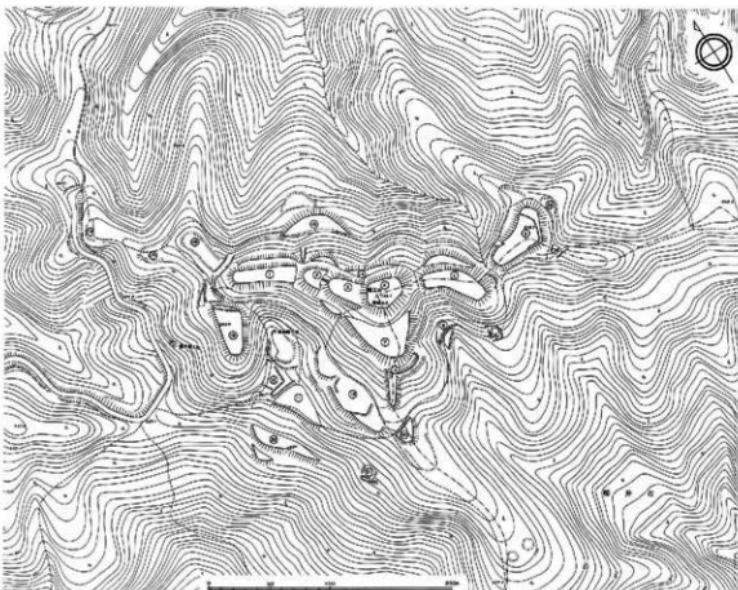


図52 龍王山城南城跡

龍王山城南城跡

調査地である③平坦地は頂上平坦地の北におりた地点である。東西幅約16m、南北長約30mで面積は約480m²である。③の標高は580.5mあり、頂上部とは4.5mの比高差がある。また頂上部と③、③と②はそれぞれ石段で結ばれている。この二つの石段は築城当所の石段と推定される。今回の調査ではこの他にも③と東側通路を結ぶ石段、②と西側通路を結ぶ石段を新たに検出した。

③平坦部は北側でやや狭くなるが長方形状を呈している。調査前はハイキングコース以外は雑草が茂り石材の露出はほとんど見られなかった。雑草の除去により幾つかの自然石の露出を認めたが建物の礎石であると推定することはなかった。調査地の中央に観察畦を残して表土を除去すると整然とした自然石の並びが検出されたのである。遺構面としては岩盤を削り出して造成された礎石立ち建物1棟分と、南側には自然石を配した石組遺構を検出した。

礎石建物（図56・57）南北方向に棟を向ける長方形の建物である。礎石列は敷地が変形しているため、現状では特に北側で東西とも平坦面いっぱいに配置され、すぐ斜面地形になっている。もちろん現地形が建築当時の敷地であるわけではないが、敷地いっぱいに建てられていたことが容易に想像される空間である。

礎石の検出状況は西側で14カ所（このうち1カ所は観察畦に埋没している）で心々1mの間隔である。東側では15カ所検出したが、心々の間隔は同じである。全長は約13mあり一般的には細かな柱間といえよう。東西方向では北側の礎石列は7カ所（このうち

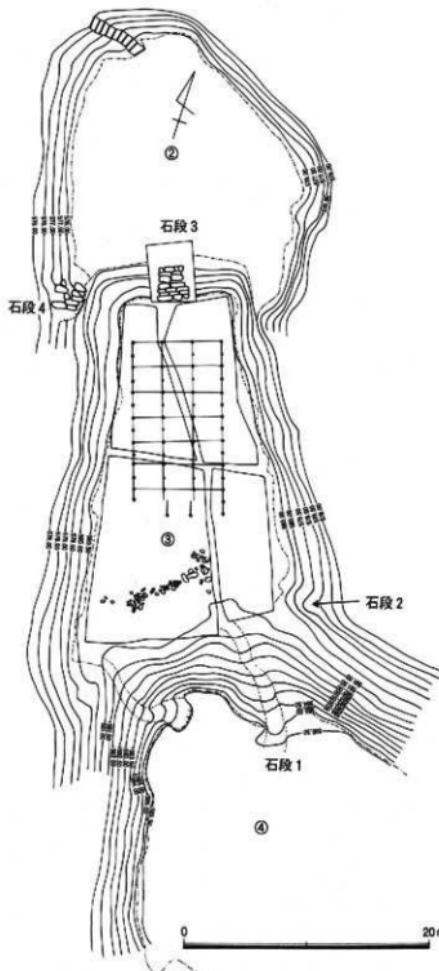


図53 南城跡と検出遺構（番号は文献1に一致する）(S=1/400)

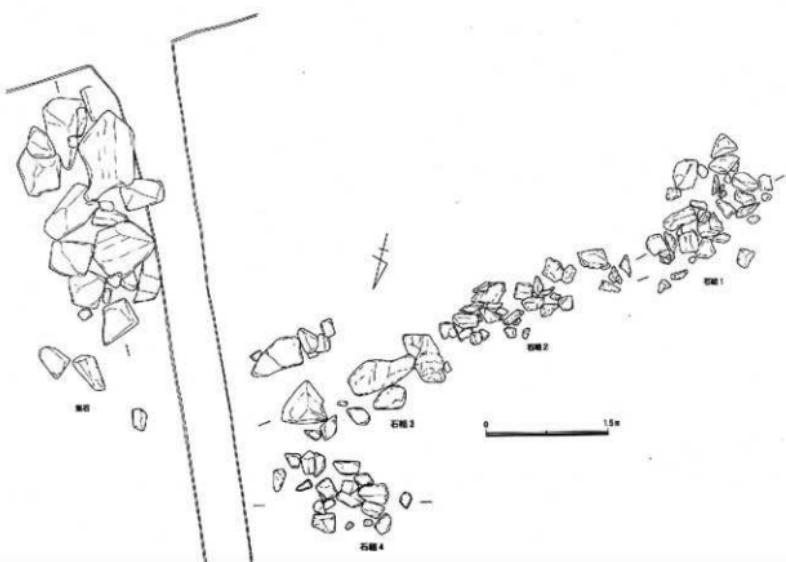


図54 碓石建物南面における石組遺構実測図

1カ所は観察畦に埋没している)

を検出した。心々間は1.2mあり、
全体では7mの規模である。

南側礎石列は移動している可能
性があり良好な検出状況ではない。

礎石の大きさに注意してみると東・

西・北の外側に配された石材は全
体に大きいが、内部の石材には大
小の明確な違いがわかる。内部で

は桁方向では2.5m、棟方向では

2mの間隔に大きい石材が配置されている。これ以外は比較的小形の石材が配置されている。大
形の石材は柱を受け、小形の石材は床束を受けるものと推定される。しかし外側の3方の石材は
ほぼ均一の大きさである。

このことは建物の概観としては南側以外細かい柱配列により堅固に建てられていることが推測
される。建物中央の棟方向で南北列に相当する地点には大形石が3個確認できるか柱通りが悪く
また抜けている石材が幾つか推測される状況である。南では礎石に使用された石材よりやや大き
めの石材が2カ所に置かれている。これは梁と桁柱列には一致しないところから出入り口の庇を

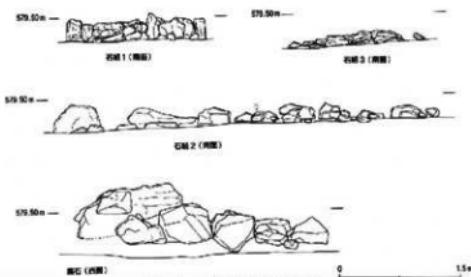


図55 石組遺構立面図

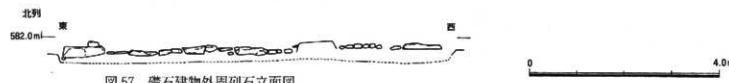
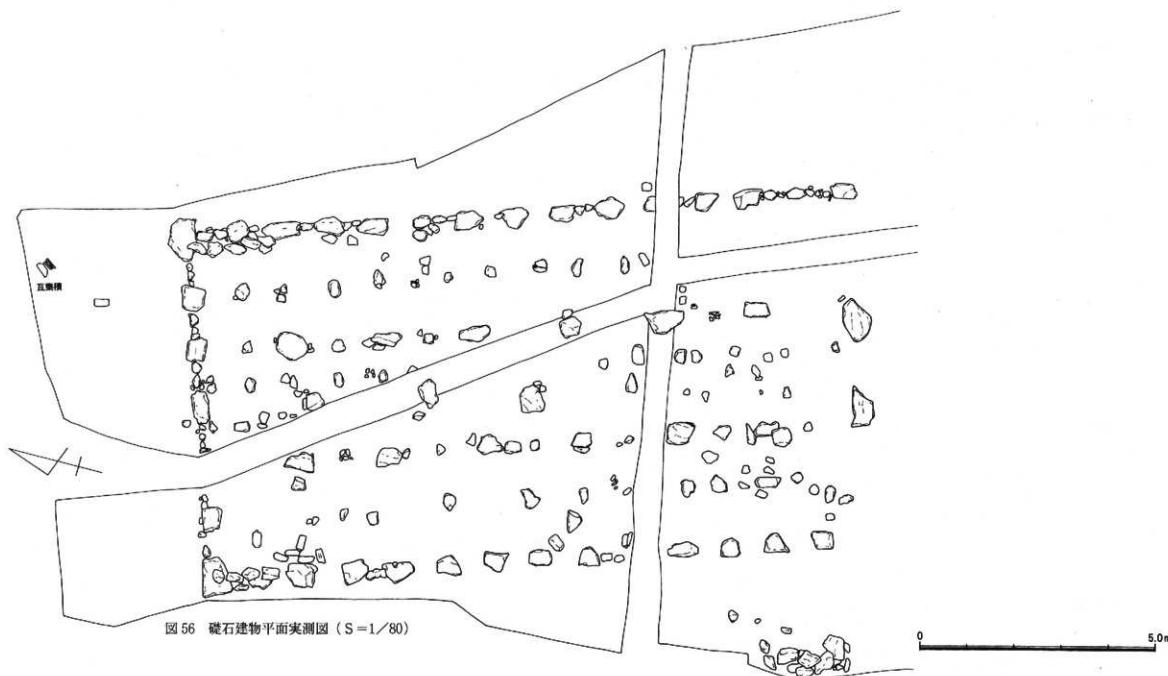


圖 57 磚石建物外周列石立面図

受けた礎石であると推定される。

以上のような礎石配列から桁行7間×梁間3間の規模で、外側の壁通りは北側の梁間が6間、東・西側の桁行が14間と細かな柱構成をとっている。また外側を巡る礎石列には、列間に小形の石があいだを埋めるように配置されている。これは壁構造に関わる石材の使用方法であり、壁本体は礎石上面まで塗られるが、塗り壁が及ばない部分にはこのような石が充填されたのであろう。建物内西北付近で6点の丸瓦、建物外北東側では5点の丸瓦を検出した。出土量としては極端に少ないものの、屋根は瓦葺きであったことを示唆している。建物の内部空間は礎石の配置状況により小部屋を仕切るような配置は見られず、基本的には床張りの大広間的な空間であったことが推測される。また遺構面では焼土面なども検出していい。

石組遺構（図54・55）礎石建物の南側のほぼ中央に位置している。③平坦地の遺構配置は前述した通り北半部は建物で占められるが、南側は基本的には空間地となっている。ここに④への石段の登り口（集石）とこれ以外には、広場の中央部に東西方向に小形の石材を組み合わせた石組列を検出した。前者については大形の石材が積み重なっている様な状況にあり遺構として考えられる要素はない。ただなぜここに大形の石材が積まれているのかということでは注目されるものである。天正6年にいたり龍王山城は破却されるわけであるが、あるいはこの時の破壊の実体を示していることも推測される。

石組遺構は全体では東西約6mあり自然石を使用する。子細に観察すると石組の特徴から4ブロックで構成されている。石組1は西端に位置

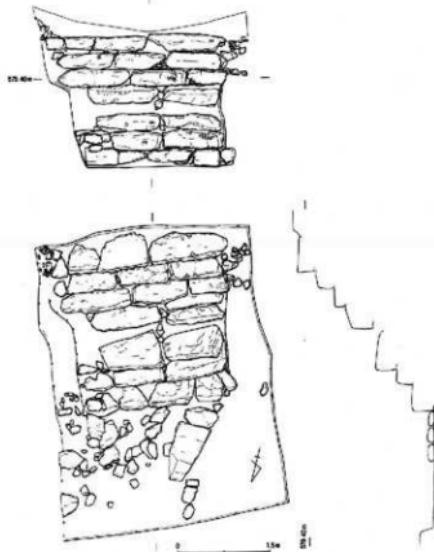


図58 石段3実測図

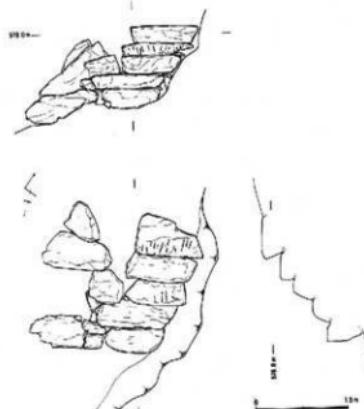


図59 石段4実測図

して2つのブロックに分けられるが、共通する特徴としては長方形の石を立てて使用し、平面的には方形を呈するように組まれている。石組2は中央の石組でここでは長方形の石は横位置に配置される。あたかも溝を意識しているような配置である。石組3は三角錐形状の石材を幾つか配置される。ここではやや大形の石材が使用されている。石組4では長方形の石を横位置にあるが、方形に配置されているため石組1と共通するようである。使用されてる石材そのものが20~30cmの立方体と小規模であるため、もとの形状を保存していることは判断されないが、石材の形状の選択や自然石を立てて使用する点などを考慮すると人工的な石組庭園の一部であると推測されよう。

石段

石段は③を中心にして4ヵ所確認（このうち第2・4石段が今回新たに確認した石段である）したが、第1・2石段については崩落が激しいため今回は調査を断念した。このため③と②を繋ぐ石段（第3石段）、および今回新たに確認した②と西側斜面の通路を繋ぐ石段（第4石段）の調査を行なった。

第3石段（図58）この石段は平坦面のほぼ中央に設置され②と③を繋いでいる。調査以前から露出していてハイキングコースの通路にもなっている。幅約3.5mのトレンチを②までのばして調査区として全体を検出した。石段は7段で構成され、高さは2.1mである。1段目の幅は約2.6mあり、最上段は約3mである。各階段は長方形に加工された石材を3石から4石によって構成され、各ステップは20~30cmとやや高い階段となっている。各段とも石材はノミによる小叩が加えられた調整面や、矢の痕跡を明瞭に残す石材も見られる。段の構成は簡単なもので、地山を階段状に削り出した地形に配置しているだけで、石材どおしの根掛かりは確認されない。また側石についてはほとんど残存していないため詳細は不明である。

第4石段（図59）②の平坦面から西側斜面地に作られた石段である。調査当初は確認されなかつた。西側斜面に露出していた石が、2石確認されたことにより石段の所在することが改めて確認されたのである。調査の結果、西側の遺存状況が悪く石材が崩落していたが全体で5段分検出された。高さは1.3m、第1段目の幅は2.2mと第3石段に比較すると小規模の石段である。ただ使用されている石材は、第3石段とほぼ同じ大きさのものが使用されているため同時期に作られたものと推定される。

IV 遺物の出土状況

③平坦面での瓦の出土状況は礎石建物内部に散乱するものと、建物外にあって5枚の丸瓦が重ねられて出土した。後者は縛った状況は確認されないものの、ひと括りされた状況を呈している。このような出土状況は、城の破壊に際して瓦を城外へ搬出した取り残しかとも考えられる。

遺物は③平坦面では丸瓦26点（うち完形品13点）、土器片18点、鉄釘3点である。このほか①平坦地において平瓦片1点と土師器片1点を採取した。このように③平坦地の調査での遺物は、瓦、土器とも極端に出土量が少ない。

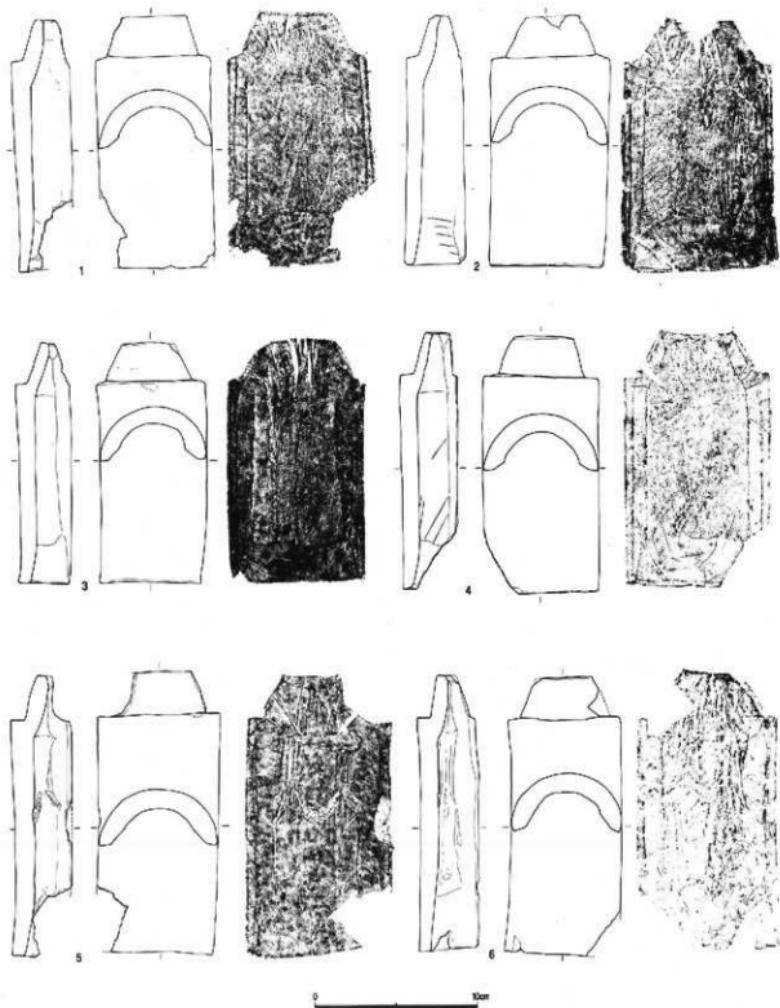


圖 60 出土九瓦実測図（1）

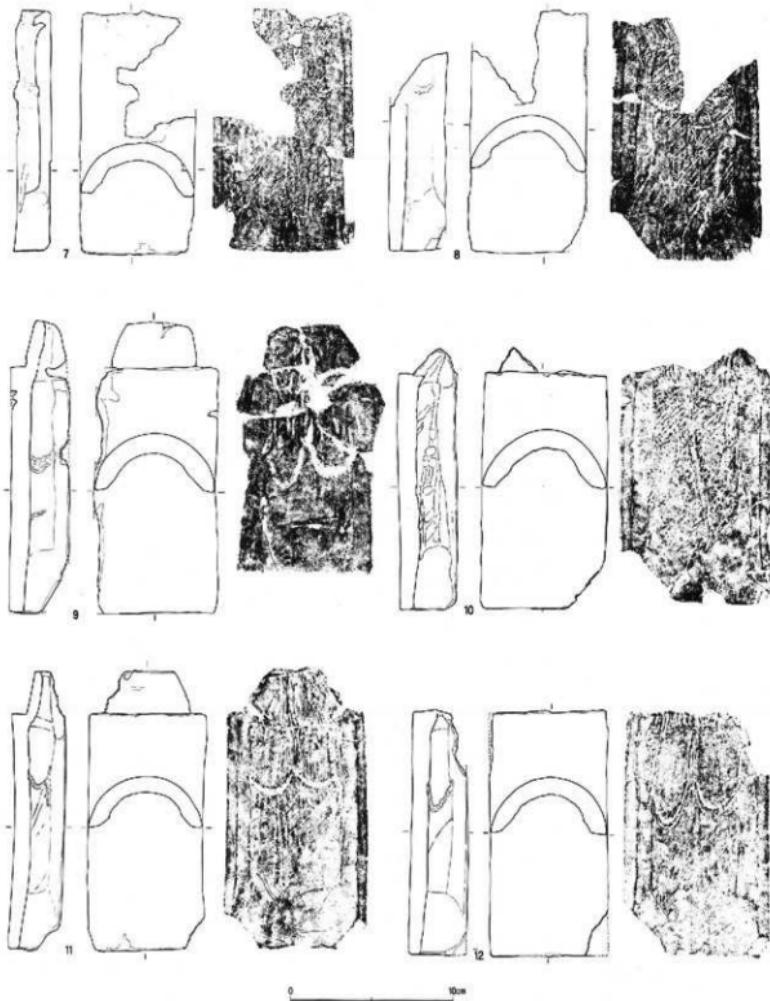


图 61 出土九瓦实测图 (2)

V 出土遺物

瓦(図60~62 1~13)

破片を含めて2型式に分類(A類・B類)できる。

粘土板切断法はともに糸切り法である。

A類は凸面を縦位の繩叩き、箒ナデで調整するが、広端縁に横ナデがみられるものもある(2)。

ナデ残しはほぼ残らないもの(1, 2, 4)と全体に薄く残るもの(3)がある。広端縁A、玉縁凹端縁A、玉縁凸端縁、広端縁凸面(2, 3, 4)は普遍的に、胸部狭端(2)

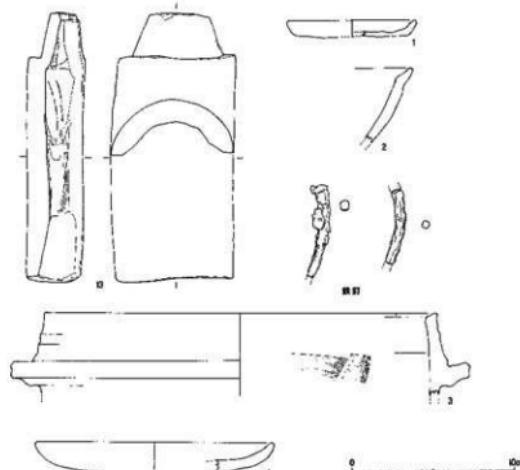


図62 出土遺物(3)

にも希に面取りが行なわれる。また、玉縁の両凸側縁は4のみ一方がCになり、全てにケズリ残しは見られない。全体にケズリ(ナデ)に用いた工具の痕跡はよくとどめている。布目はB類に比べて若干粗く1cmあたり 11×9 の土1である。色調は暗青灰を基調とし焼しをかけたと思われるが全体的に斑である。胎土は須質で径10mm以上的小石が混ざる点で共通する。

B類の最大の特徴は連結面に刻印を持つことである。現状では原体がひとつで押されたこと

表2 丸瓦計測表

	全長	肩部長	玉縁 部長	肩部幅		玉縁部幅		肩部高		玉縁部高		厚さ	吊 り 締	刻 印
				前端	後端	前端	尻端	前端	後端	段部	尻部			
1	310	259	52	(141)	(140)	112	79	66	75	60	44	20	18	—
2	315	252	49	138	144	111	66	75	69	54	(40)	20	16	—
3	296	245	50	126	134	105	(65)	67	68	53	36	20	13	—
4	315	264	50	(140)	139	106	73	67	71	54	40	22	12	—
5	343	289	54	(142)	150	114	—	72	75	57	42	24	20	○ ○
6	339	287	52	(142)	138	(110)	69	72	77	60	53	23	18	○ ○
7	—	294	—	(140)	(141)	—	—	65	66	49	—	20	—	○ ○
8	—	293	—	(141)	(146)	—	—	68	(66)	(48)	—	20	—	—
9	358	300	58	(156)	(148)	104	81	73	73	57	(43)	24	17	○ ○
10	—	290	—	153	148	111	—	70	72	55	—	22	—	○ ○
11	341	288	53	(147)	143	107	65	68	66	47	40	19	11	○ ○ ○
12	—	298	—	(145)	(147)	—	—	71	70	54	—	20	—	○ ○ ○
13	326	271	56	143	144	112	73	69	70	55	44	26	15	○ ○

が分かるが、その文様がいわゆる「三鱗」の三角形の底辺の一辺を欠損、摩滅したものであるが、元来そうであったのか判然としない。凸面は縦位の繩叩きの後、強い箒ナデ(ケズリカ)を施す。繩目が全く残らないものもある(13)が全体に薄く残るのが一般的である。玉縁凹端縁A、広端縁凸面、胴部狭端には面取りが見られない。また、玉縁の両凸側縁はAで(5)のみケズリ残しが無い。凹面の特徴として、玉縁付け根に粘土上の接合痕が認められ、円周の違う胴部と玉縁の粘土を別々に模骨に巻き付けた可能性がある。吊り紐は中央から上半部にやや長く垂らすB a(9, 12)とA b(5~8, 10, 11, 13)の2種類がみられるが、山部を布袋に通すだけで捻じりや結び目がない点で共通する。また、その山部付近に縦位の幅5mmの長条形の内叩きがはいるもの(5~7, 12)がある。さらに梢円形压痕(8, 9)が胴部上半部にみられるものがあるが内叩きとは共存しない。布目は1

2×10 の士1で、つき方がAに比して弱い。(5)のみ凸面胴部狭端よりに布目をもつ。色調は(13)が青灰色系、(8)が赤灰がかり斑になる他は明緑灰、灰色である。胎土は一般的には須恵質であるが、粘土質で灰白色を呈するもの(9)がみられる。

これに型式認定できる破片を加えて24点で統計をとったところ、内訳はA類が8点(33%)でB類が16点(66%)である。法隆寺の年代観によるとA類が室町前期I、B類が室町中期から後期IIに比定でき、一見して古い瓦の方が多く用いられている事に気づく。またその中でも法量にばらつきが認められる。

土器(図62)

1の土師器皿は口径8cm、器高1cmの小皿である。4の土師器皿は①平坦部で採取した資料である。口径14.6cm、器高1.8cmあり、口縁部に煤が付着している。2は瓦質掘り鉢の破片である。3は土師質土釜の破片で、口径24.2cmあり胎土の粗さから河内産と推定される。



図63 刻印瓦拓影 (S = 1/2)

VI まとめ

中世山城としてはあまり例を見ない瓦葺きの礎石建物とそれに付随する石組庭園遺構を検出した。礎石建物はその外観に注目すると細かな柱列などから堅固な建物を想定することができる。これは山に築かれたという過酷な自然に対処すると同時に、瓦葺きを伴った本格的な城郭建物を意識して築かれたことも考慮されるだろう。また建物の内部空間には大広間的な間取りであったことがうかがえる。

龍王山城は前述したように天正6年（1587）に織田信長により破却命令を受けて取り壊されているのであるが、創建の時期はいつに考えられるであろうか。

出土した丸瓦の観察では凹面に糸切り法（コビキ技法A）の痕跡と、抜き取り縄の痕跡が見られる。いずれも織豊期城郭瓦以前の技法で作られたものと判断される。特に抜き取り縄の痕跡は室町時代末期までの技法であり、この点では城の破却時期と齟齬をきたさない。山城での瓦葺き建物の出現は、織田信長の安土城から始まると言われている。しかし、松永久秀の築城になる信貴山城と多聞山城では瓦が出土し、瓦葺きの建物が織田信長以前にあったことは確かであろう。

次に山城における礎石建物であるが、これも16世紀後半にならなければ採用されなかつたようだ。中世山城は一般的には掘立柱建物が城郭建物の主流であった。ところで前述した信貴山城や多聞山城では不十分ながら発掘調査により礎石建物の一部が検出されている。

文献資料の研究成果によれば、永禄3年（1560）には龍王山城は十市氏から松永の支配するところになったが、この前年には信貴山城と多聞山城が松永により石垣を巡らせ、建物には周辺の寺院より微発した瓦を葺くという大改修を行なっているのである。このような松永による事例と考古学的な検討では、龍王山城南城跡で検出した瓦葺きの礎石建物の築造は、永禄3年ごろの松永久秀によるものと考えられよう。十市氏段階の城郭建物がそれ以前にあったことは想像されるが遺構としては検出されなかった。

最頂部である④と①平坦部でも平瓦片を採取しており、調査を行なった③平坦部以外においても瓦葺き建物が城郭建築として作られていたことが考えられる。

また南城より規模の大きい北城は考古学的には未調査の状況である。現状では土壘や規模の大きい石垣、井戸なども確認されているところから北城が本来の詰め城であったと考えられ、南北両城あわせての考古学的調査が必要である。

（参考文献）

1. 村田修三 1981『龍王山城跡調査概要』天理市教育委員会

図

版



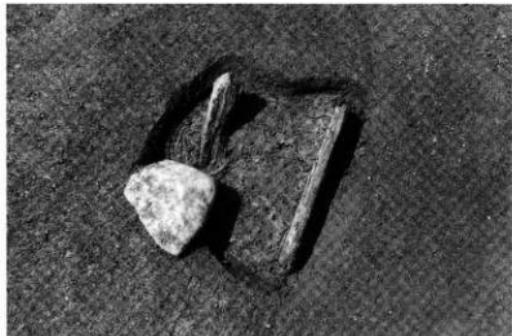
◀ 調査前全景（南から）



◀ 上部造構面検出状況（北から）



◀ 柱列 SA 01 検出状況（北から）



◀柱穴SA01-C検出状況
(北から)



◀自然河道NR01完掘状況
(南西から)



◀調査区全景（南から）



◀ 東壁土層断面（南西から）



◀ 自然河道 NR 02 土層断面
(北西から)



◀ 自然河道 NR 01・02 重複部分
土層断面（南西から）



◀ NR 01 北岸土層断面（西から）



◀ NR 02 北岸土層断面（北西から）



◀ 調査風景（北から）